

## 翻 訳

### ヘルマン・バウジンガー

## ドイツ人はどこまでドイツ的？ (2)

— 国民性をめぐるステレオタイプ・イメージの虚実と因由 —

河 野 眞 (訳)

### 第二章：国民性の検証

1. お国料理 — 食と飲み物への寸評	161
2. 狭くても気楽なのが……	167
3. 同じ所に住み続け、そして旅行が大好き	173
4. くつろげるのが何より	179 (以上は本誌第20号に掲載)
5. ドイツ人は三人寄れば一クラブ	49
6. 自然と歴史	54
7. 規則は生きることの半分	59
8. 冗談が分かるの？	66
訳 注	75

#### 5. ドイツ人は三人よれば一クラブ

<ドイツ人は三人よれば一クラブ>と言われる。もちろん極端な言い方で、学問的な説明ではない。イギリスの社会学はウェールズ人について同様の指摘をする。すなわち、3人か4人のウェールズ人が集まれば、彼らは必ずコミッティーを作ると言う。またアメリカ合衆国の住民については、誰もが3つか4つの団体のメンバーになっていると言う。それゆえ、特定の目的のために規則的な集いが組織され、人間が自宅の外にもとめる集まりが組織の性格をとることは決して変わったことではなく、近代化されたあらゆる社会で見られるものであろう。しかしクラブへの思い入れはドイツ人の特徴であるとして繰り返し

取り上げられる。もっとも、その意味には、団体への参加意欲を〈理想的〉なものとして賞賛することもあれば、〈団体の空想画〉への批判のこともありはする。

ドイツにおいてクラブ (Verein) という組織形態\*に大きな意義があることは、統計が示している。ドイツ・スポーツ連盟の傘下にあるクラブだけでも、そのメンバーは約2300万人に上る。ドイツ歌唱連盟のもとにあるクラブのメンバーもほとんど2000万人である。ドイツ・アルプス・クラブや地域のワンダーフォーゲル・クラブのメンバーも合計すれば数百万人になる。それに加えて、小さな団体や組織が数多くある。ドイツでは成人の60%以上が少なくとも一つのクラブのメンバーとして会費を納めている計算になる。もっとも、ほとんどすべてのクラブでは、〈活動的な〉メンバーよりも〈受動的な会員〉の方がずっと多い。例えば小さな都市の市長は、できるだけすべてのクラブのメンバーとなることを心掛けている。歌唱クラブから体操クラブまで、小動物飼育クラブからヴォランティア消防クラブまで、ワンダーフォーゲル・クラブから家庭園芸クラブまで、という具合である。しかし、高いポストの人物たちや企業家たちが多くのクラブのメンバーに〈ならねばならない〉事実、これまた地域の共同生活のなかでのクラブの意味を証しているところがあるであろう。

村の生活は、多くの面で等しいところがある。村の文化はクラブ文化でもある。公的な文化施設が平等を重んじ地方分散的な構造であるにも拘らず、一般的には、シンフォニーを演奏する大きなオーケストラも大きな演劇も村にはやってこない。文化生活は〈手作り〉であり、地元民によって担われる。それに形を与えるのは、何よりも種々のクラブである。地域の祭り行事となれば、そうしたクラブが連携して、祭りの夕べや上演すべき演目や行列やお楽しみの品物などを盛り込んだプログラムを作成する。あるいはそれぞれのクラブがプログラムを組むこともある。音楽の演奏、アマチュア劇団の芝居、夕べの催し、クリスマスの祭りなどである。そうした状況は村だけでなく、小さな都市でもあまり変わらない。小都市でも、文化的な行事の重要部分が種々のクラブによって担当される。それに対して大都市では、プロフェッショナルな劇場やオーケストラや博物館や画廊など活動の影に隠れてしまう。しかしそこでも、クラブ活動の厚いネットワークは、中位や下位の層の人々には、〈もっともらしい〉文化よりも大きな意味をもちつづけている。

かくしてクラブ組織は、町村体のなかで重要な機能を果たしている。しかしクラブはまたそのステイタスを部分的には伝統に負っている。言い換えれば、クラブは既に非常に長く存続しており、それゆえ公的な生活もそれを除いては考えられなくなっている。それゆえまた多くのクラブはその古いこと自体が名誉であると自らを回顧する。

早く中世末にも、宗教的な兄弟団の他に、世俗的な自助組織として重要なものが成立していた。特に都市の防衛を保障する役割を負った射撃団がそうであり、貴族の武藝試合へ

の市民的な対抗として射撃祭の開催をはじめた。その実際的な意味は特に19世紀以来、戦闘技術の変化と軍事的な組織の解体のために低下の一途をたどった。しかし多数の射撃団が、伝統的なクラブ組織の自負をもち、射撃祭を催してきた。射撃祭は試合を行なって射撃の王を選ぶ他、多彩な民衆の楽しみを盛り込んだものとして、特に北ドイツの町や村では最も重要な祭りでもある。新しいクラブの設立が企図されたのは、啓蒙主義時代であった。社会的な結びつきの在来の構造は血縁や隣人組に規定されて、用をなさないところが出てきた。都市部では、教養クラブ、読書クラブなどの設立がみられた。村落部では、農民たちによる農業関係の結社やクラブが穀物栽培や酪農の新しい合理的な知識を媒介につとめた。

しかしクラブ設立において今日まで基準となるものの波が起きたのは19世紀前半であった。各地で歌唱クラブが発足した。やや遅れて、<sup>トゥルン</sup>体操クラブが成立した。クラブのこの二種類のタイプは、リベラリズムとナショナリズムを骨子とした運動の重要な担い手であった。1848-49年の革命\*に先立つ時期には、多くのクラブのなかで、国を支配する者たちの非民主主義的な恣意に対する抵抗が形をとった。殊に<sup>トゥルナー</sup>体操者\*たちは、政治的転覆に加担しているとの嫌疑を受け、そのため王政復古期には多くの国で〈体操取り締まり〉が告知された。1848年以降、リベラルな理念に戻ると、クラブ組織は今度はナショナリズムの考え方の代表する役割を息長く一層つよく果たすこととなった。次に市民による歌唱クラブについては、国民のあいだでの文化形成に寄与したことが跡づけられる。その頃のドイツは、さまざまな経済的な網の目ができ（例えば1834年の関税同盟の成立）、領邦間の政治的連携も進んでいたが、なお国家の枠は存在せず、国民国家としての統一にも至っていなかった。歌唱クラブは、この統一への開拓者を自認したのである。ドイツ歌曲者同盟の設立者は、こう述べたものである。〈ドイツの歌曲は、寸断されたドイツの国土に、一体性の理念を涵養する共属感情を覚醒せしめる絆の一つである〉。事実、当時の歌謡物象のなかでは、センチメンタルな自然歌曲と並んで〈祖国の歌〉が中心的であった。しかしナショナリズムのアクセントは、歌謡や祝辞のなかに働いただけでなく、歌唱者（それは体操者も同じであったが）が自分たちの狭い領邦境界を踏み越えて、ドイツの他の領邦や地域の代表者たちと共に大きな祭典に集まることによっても推進された。ドイツでの最初の体操祭は1860年、最初の歌謡祭は1861年であり、したがってドイツ帝国の成立\*の10年前である。それゆえ帝国の成立と共に、市民的なクラブ組織が公言していたその政治的責務は終わった。しかし、地域での文化の担い手としてのクラブはその意義を保った。そして第一次大戦までの期間には、多数の新しいタイプのクラブが成立した。歴史クラブや上古クラブであるが、それらは、地域の歴史に向かい、かつ各都市の博物館の設立に力を発揮した。美化クラブは公園の設置や展望台の建設に奮闘し、ワンダー・クラブは自然

保護や風土保全に力を入れ、ふるさと連合は農村の伝統に躍起になり、生活改善クラブは健康と保養の新たな形態の宣伝につとめた。

これら諸々のクラブも政治的にニュートラルではなかった。保守的な目標を担うことが圧倒的であり、市民的な活動の拡まりを補強する役割を果たした。さらに19世紀の60年代からは、市民のクラブ組織は、プロレタリアートのクラブ組織や連合組織と競合するようになった。労働者はまた独自に体操クラブや歌曲クラブや教養クラブを設立し、それらの組織はまた社会主義の諸政党と近い関係に立った。もともと、その活動内容は、市民のクラブとそう違ってはいなかった。スポーツ活動は似通っており、歌曲でも市民の歌曲クラブと同じ歌がうたわれることも多かった。しかし、独自のアクセントの置き方への動きも見受けられた。スポーツの分野では、労働者のクラブの場合には試合に重点をおくのではなく、皆で一緒に身体を動かす形態が前面に出るようになった。労働者の歌曲クラブでは、ロマンティックな歌謡に、自由を歌う種類が加わった。労働者の教養クラブでは、実際の教養を磨くための練習に加えて、合理主義的な世界像を教えることが重要な役割を果たした。

1933年に、労働者のクラブ組織はそっくり廃止された。1945年以降は、ドイツの政治がアンチ・ Kommunismusであったことを背景に、労働者によるクラブ設立のチャンスはほとんどなかったが、大多数の民衆はもはやそれを求めてもいなかった。1950年に戦後最初のドイツ体操祭が開催されたとき、ドイツ連邦大統領テオドル・ホイス\*はイロニーをこめてこう述べた。〈プロレタリアート・マルキシズムの懸垂もなければ、市民・資本家の腕立て伏せもありません〉。このコメントは万雷の拍手を呼んだ。

今日では、すべてのクラブ組織が、事実上、政治的にニュートラルである。これは、諸々のクラブが自己を際立たせるに際して、政治的な差異、とりわけ社会的な差異を反映することを排除するわけではない。中規模の都市でも、2つか3つの歌曲クラブがあることが多いが、あるクラブには土地の名士や学者や商人があつまり、他のクラブにはやや下積みホワイターや労働者があつまるのである。クラブの目的も社会的な区分を見せることがある。10年か20年前までは、テニス・クラブは排他性が強かった。やがて豊かさの幅が広がり、また特にボリス・ベッカー\*やシュテフィ・グラフ\*の活躍が刺激となってテニスがブームとなり、スポーツクラブに占めるテニス関係の比重が高まり、テニスの特化したクラブの非常な増加につながった。今日では、中規模の村落でも野外のテニス・コートがあるのが普通であり、それどころか屋内テニス・ホールすら珍しくなくなっている。〈今は、皆がテニスをする〉ともよく言われるが、やはり誇張であろう。たしかに裾野が著しく広がりはしたが、依然、テニスは経済的に余裕のある少数者のスポーツという性格を残している。さらに注目すべきは、ポピュラー化への力が強まると、それに取って代わると動きも対抗して生じることである。数年前から、テニスも乗馬も、社会的な格差

に大きく関係するスポーツではなくなっている。それに代わるかのように、スカッシュや、また特にゴルフが前面に出てきている。ゴルフは、ほんの少し前までは、施設はごく僅かしかなかった。近年、ゴルフ場の増加はめざましいが、それに伴って自然保護派との衝突も頻繁になっている。

スポーツを例にとれば、クラブ組織が、私たちの余暇社会に向けたサービス機関の機能を引き受けていることも見逃せない。昔は体操、それに加えてサッカーだったのに較べて、今日では、村のクラブの水準でも、スポーツの種類は非常に多くなっている。体操（機械体操）でも女性を対象にしたものや高齢者向けのものもあり、子供のための伝統的な体操もある。もちろん水泳、卓球、サッカー、ハンドボール、バレーボール、バスケットボール、柔道、空手、スキー、スケート、サーフィン、等々もある。これらの種目を扱うのがサービスであると説かれるとすれば、クラブの構造も変化しないわけにはゆかない。メンバーはもはや等しくエモーショナルな結びつきを <彼らの> クラブにもっているのではなく、所属する先をも変えてゆくであろう。それに、トレーニングや組織の仕事を名誉職として引き受ける人員も充分に見出せない。事実、クラブのあり方にもプロフェッショナルへの変化が起きており、それと共に醒めた姿勢が強まっている。

しかし、それは一つの傾向である。多数の、たぶんドイツの大多数のクラブ組織では、昔も今も、メンバーは愛着をもち、クラブとの一体性の心理が続いている。加えて、クラブはその機能が多彩であることによって（会長から帳簿係まで、トレーナーから場内管理人まで）、昔も今も、社会学者の言い方を用いれば <社会的人格の練習場> である。しかし狭い意味での政治的活動は一般にクラブではもとめられない。そのためには種々の政党があり、住民運動の諸団体もある。それゆえテーゼの形で言い表すなら、ドイツではクラブ組織が大きな意味をもつと言っても、クラブはそもそも19世紀の市民社会の産物であり、それゆえドイツ人の政治的覚醒を証しているのではなく、むしろ長期にわたった政治的失神状態と中性化の証左なのである。

すでに19世紀末にはクラブ人間に対する鋭い批判が見られたが、その背景がこれであった。クラブ活動に入れ揚げている者にとっては、自分がそのメンバーであることは（もつとも幾つかのクラブに属していることも多かったのでメンバー資格は複数になるが）途方もなく大きな意味をもっていた。そうした熱狂者は、特定のつか複数のクラブへの忠誠を棺桶まで引きずった。事実、ドイツでは、葬儀は一種の演出でもある。そこでは、クラブの会長による弔辞と献花が最も大きな比重を占める。しかしそれは、クラブに熱狂的であった人物が、自己の存在がクラブにとって欠かすべらざるものとの思い込みが見紛いようもなく否定される瞬間でもある。たしかにその人物にとって、クラブの外では、人間らしさを味わえる大きなチャンスは先ずなかった。クラブは彼にとって世界であった。いず

れにせよ、クラブは、彼にとって公共の場の代わりになるもう一つの形態であった。クラブ人間はコミカルな人間像であり、カリカチュアである。しかしそれは現実の一こまに他ならない。ドイツの現実であり、それと相照らすものとして引きこもった人間像である。

## 6. 自然と歴史

カール・ヤーコブ・ブルクハルト\*は、1954年にドイツ出版協会「平和賞」を受けたとき、その受諾講演のなかで、〈ふるさと〉(Heimat)の語を中心に据えた。ハイマートは〈私たちの言語精神が創った言葉であり、他の言語では見当たらない〉と彼は述べた。有力な政治家が祝辞などで述べるのも同じで、言い方にはヴァリエーションはあるものの、その大半は、ハイマートが翻訳不能の言葉であるとの大雑把な考え方を示している。かかる理解には示唆するものが含まれはするが、誤ってもいる。ドイツ語の“Heimat”に当たる外国語は幾らもある。ぴったり重なるものが無いのはその通りであろうが、それは他の多くの言葉でも同じである。〈ハイマート〉をめぐる翻訳不能という命題から出発するなら、他所では人間は自分が生い育った、あるいは現に暮らしている場所への細やかな内面的関係が培われなかったという勝手な憶測へ走ってゆく。結びつきの強弱がどこでも同じではないにしても、また同じようなあり方をするわけではないにせよ、かかる憶測が当たらないことは明らかであろう。

〈ハイマート〉が翻訳するのに困難であるのは、それが、特定の村や地方への個人的な愛着という一般的な感情では収まりきらないことにあるであろう。むしろそれは、そうした感情が帯びる特殊な色合いである。ドイツでは特別の意味をもつものであるふるさと概念へのロマンティシズムの仮説である。19世紀に入るまでは、〈ハイマート〉はポジティブな意味をもっていたにしても、どちらかと言えば冷静な概念であった。キリスト教会によって提示されたものとして天国のふるさとという宗教的な寓喩があったが、また特に此岸の所有、すなわち現存がもつところの確かさや慣れ親しんだ秩序を意味した。しかし19世紀が進むなかで、〈ハイマート〉に付着していた諸々の観念が、手堅い物質的な基盤から遊離する度合いが強まった。ハイマートは、生成しつつある近代への対比的な構図、すなわち工業化や都市化への対極となった。かくしてハイマートは、第一に、損なわれていず、平和で調和ある自然に定着した。

数十年を経ずして、何十というふるさと歌謡が成立した。そこで、畑は森に和し、山岳は湖沼に応じ、ふるさとの土地への愛はリフレインとなった。その多くはふるさとの土地を挙げて歌ったが、それは国土(州)の全体ではなく、小さな地域のことであった。それにも拘らず、それらの歌は交替が可能であった。〈北海の波が岸辺を打つ〉とはフリースラント\*

の歌である。すなわち、砂丘にエニシダが花をつけ、鷗が鳴き声をきかせ、嵐が轟く土地の歌である。しかしそれは少しも特殊なものではなかった。歌謡者の一団は、海とはまるで無縁な地方や、それどころかアルプス地方にまでこの歌を携え、ふるさとの歌として溶け込ませた。それは、南と北の国民的な絆といったものではなかった。説明をつけるとすれば、この種のあらゆる歌謡では、憂いを含んだメロディーが歌詞を影の薄いものとしていたためだけではない。これらの歌謡が交替可能なのは、特殊な地方的な描写において自然が具体的ではないことによるだけでなく、むしろそこに自然一般が提示されることによる。すなわち、手つかずの観を呈する自然、健康ながら神秘性に富んだ自然である。

かかる観点が特にあきらかになるのは、森が歌われるときであろう。1890年頃、フンスリュックにおいて「森の喜び」が成り立った\*。それも当初は情熱的な男性コーラスのトレモロを写して“Waldeslu-u-ust”と表記されていた。〈森の喜びよ、森の喜びよ！おゝ、淋しく打つ胸の高鳴りよ！小鳥たちよ、そなた等は心嬉しく胸膨らませて愛らしい歌声を聴かせてくれる〉。詩歌としては上々の出来ではない。しかし人間の失意と自然の調和との対比を鮮やかならしめてはいよう。その自然はまた、小さく細やかである（小鳥と愛らしい歌声）と共に力強くも煩わされることなく（胸膨らませて）現れる。比類なくポエティックな歌謡でも、森は、人間の生き様の対極、すなわち脱出と、あらゆる非自然的な営為に抗する避難所となっている。ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ\*はそれを詩歌で言い表した。

人為の世界が外に  
欺きの風音を立てるとき  
汝、今一度、吾を囲みて  
張り渡される緑の天幕よ

人為の世界への対抗としての森 — この捉え方のいかに主導的となったことか。森の感情は、牧歌的世界への引きこもりと、空を仰ぐ昂揚とのあいだを行き交いする。アイヒェンドルフの緑の天幕は、ありふれた日常世界からの切断にとどまらない。より高次元な世界の象徴でもある。すなわち、自然の教会堂としての森である。

ドイツの森、これはドイツに存する森林そのものではない。森林という地勢的な面積を指すのではなく、感情の質である。しかもそれが形作られたのは後世になってからであった。18世紀末でも、なお旅行者は森の黒い危険な側面を強調していた。それが、ようやく対極的な形象へと移行した。この転換は頭のなかで反映されたが、それにとどまらなかった。今や森は効果的に制御できる度合いを強めた。手入れされ、整えられたのである。

<ドイツの森> は、始まりつつある現代の徹底した森林管理の結果であった。しかし効用の局面はロマン的な姿勢の前に後退した。もとよりそうした姿勢もドイツ人だけのものではなかったが、ドイツにおいて特にポピュラーになったのである。因みに林業の収益では、フランスはドイツの二倍以上である。これには、大方のドイツ人が驚くのは間違いないが、また乱伐のもたらすものとただちに決め付けることと思われる。総じてドイツ人は、森と自然への細やかで温かな関係は、自分たちのあいだに限られることを願っている。ドイツでは、山々には美しい山道が開かれ、沢山のワンダー・クラブがある。ひっそりした森も、日曜にはそのメンバーでいっぱいになる。各地に展望台が設けられて、田野を一望することができる。国土の五分之一は自然保護の空間である。人々は極めて早い時期から、この上なく熱心に環境被害を議論してきた。

自然への姿勢におけるドイツ人の自己評価はいささか行き過ぎてもいる。自然への感動は決して借り物であったことは無い、とドイツ人は考える。しかし、森林荒廃をめぐる議論が、隣国ではヒステリーとして屢々斥けられてきたのは事実である。エモーショナルに叫ばれた <森の死滅> (Waldsterben) を指す表現がイギリスやフランスでは外来語として受けとめられたのはシンボリックでもある。そこでは、むしろ距離をおいてこの問題をとらえる姿勢が見受けられる。<自然な> 生き方というレッテルを貼ったものならどんなものでもドイツでは広い反響を呼ぶかの観すら呈している。自然療法の成果は、ここでは医学として認識されるよりは、<自主的な医学> (alternative Medizin) として主義主張がやたらに盛り込まれる。葉草も素人療法の間では大きな役割を果たしている。エキゾチックな自然薬がよく売れる。ヴェジタリアン食への志向は、ヨーロッパのどの隣国よりも頻繁かつ持続的である。裸体文化 (ヌーディズム)\* は、ドイツにおいて最も強く後ろ盾を得た。実に、ここに挙げたどの領域も参加する信奉者の数が多いが、要点はそれだけではない。その実行には、たいてい、自然と自然らしさという (とりとめのない中身とは言え) 決然たる観念が結びつくのである。

自然らしさの標識のもとに、ドイツでは、歴史的変化という早道をも遮断し、少なくともそれにブレーキをかけることが目指された。流行とは、すばやい交替と定義されるところの現象である。ドイツでは、他の国々の比較すると著しい特徴だが、流行の歴史は、流行を敵視する歴史に裏打ちされてきた。これには非常に多くのモチーフがはたらいている。主要には次の諸点である。ピューリタンの宗教的モチーフ：世俗的な華美に向けられた警告。国民経済的モチーフ：儉約の勧め。社会的モチーフ：流行を受け入れた場合に起きる下位の諸層がその共有を要求することを防止しようとの姿勢。最後に審美的モチーフ：絶えざる変動による基準の混乱への対抗。しかし、自然らしさという契機は、特に前面に置いて然るべきモチーフであろう。自然らしさをもった衣装形態の安堵感にひたって、熱

病のように流行を追うことから逃れようとするのである。

これには異論も起きるであろう。他所でも、駆け抜ける流行に誰も彼もが休む間もなく虜にされるわけではない、と言うであろう。たしかに、アメリカのジーンズは、数十年前からドイツでも普通の服装になっているが、これなどは、流行の波から比較的独立した品目である。ドイツでは、簡素な仕立ての、各地方に民俗衣装に依拠した服飾が重要な役割を果たす。例えばドイツ南部では、ローデン・コート\*、ヤンケル、革製の半ズボン\*、ダーンドゥル\*等である。民俗衣装モードという言葉も聞かれるが、そこで気づくのは、ファッション・エージェントはこの分野も手がけていること、またそのときの〈民俗衣装〉(Tracht)の概念が目指しているのはほとんど没時間的なジャンルに他ならないことである。

ドイツの各地方に関する旅行ガイドブックや地方案内には、民俗衣装は先ず欠けることは無い。観光案内のパンフレットには、民俗衣装を着けた魅力的な若い女性あるいはカップルのカラー写真が入っていることが多い。シュヴァーベン地方でも、そうした写真には、古くからの民俗衣装が今日まで保たれてきたとのコメントがよく付けられる。しかし村落では民衆は何世紀にもわたって色彩豊かな民俗衣装でパレードをしたり散策したりしていたなどと考えるのは馬鹿げている。大多数の人々にとっては、今日示されるような民俗衣装は、まったく手がとどかなかった。遺産目録などの古文書から明らかになるように、人々は衣類に関しては一揃いか二揃いを使っているに過ぎないことが屢々であった。それらは当然ながら、簡素で質素で丈夫な衣服でなければならず、見得を張るためのきらびやかなものではなかった。わずかに裕福な農民や資産のある名望家たちが、古い時代から日曜や祭日のための晴れ着をもっているにすぎなかった。さらに言えば、それらの晴着は、形態や色彩や付属の装飾品において、宮廷の流行に強く倣っていることが多かった。後には、色調豊かな衣装が庶民にも着用されたが、それは都会の人間の目を惹くための標識であり、またその外見を要する仕事と結びついていることが多かった。町で開かれる定期市の売り子であったり、都市の奉公人のしるしであったり、風景画家のモデルであったりという具合である。売春婦もまたそうした衣装を身にまとった。また19世紀を通して、支配家門が、領内の子供に民俗衣装を着せて忠誠を表す催しを企画した。そのときの衣装は部分的にはその土地の伝統の依拠していたが、またその特殊な目的に合わせて優美にされ、またその方向で発展することも少なくなかった。そして最後に、観光地を中心に民俗衣装の諸団体が結成された。行列や舞踏やレビューに際して民俗衣装を着用して盛り上げるのが、そうしたクラブ組織の目的であった。またそれは観光地に限られることでもなかった。もっとも、民俗衣装を問題にするなら、そうした一時期の動向や特殊な催しは、一般的に下火になりつつある。多くの人々にとって、民俗衣装は、端的に古きもの、近代以前、自然らしきのシンボルである。

もし、ドイツ人は大まかな由緒ヒストワールの感覚すら持ち合わせないなどと言うなら、それはそれで奇妙なことになろう。ドイツの史家や歴史哲学の研究者のなかには、世界的な水準から見ても大きな意義を有する人々が少なくない。歴史の専門家はドイツでは決して孤立した存在ではない。歴史記述も、非常に専門的である場合は別として、多くの読者をもっている。史誌に関わる博物館や展示会を訪れる人も多い。歴史関係のクラブ組織には、関心を寄せる大勢のアマチュアが集まる。しかし、そうした活発な動きにおいて注目すべき傾向がある。一般の関心が大きくなればなるほど、そこでの対象は現代から遠ざかるのである。近い過去が取り上げられると講演会のホールが半分がら空きになるが、これは、ナチズムの過誤をどう見るかについて心の準備ができていないためであるとの批判がなされている。それもたしかに根拠ではあろう。しかし先の光景は、必ずしもこの数十年前の歴史に限られない。1918年の革命の挫折\*は、1848年の革命\*に較べると、はるかに関心が低い。ナポレオン時代\*は、三十年戦争\*ほどには興味を惹かない（ドイツの広い範囲が三十年戦争の影響を受けたことは自体は確かである）。王政復古時代\*はシュタウフェン朝の皇帝時代\*の栄光には及ばない。言うまでもなく黎明期\*は、由緒というファンタジーにとっても、種々の由来をめぐるファンタジーにとっても、特別大きな意味をもつようである。なかでも魅力に富むのは、大きな射程での連続性への仮託であろう。当たっている場合もないではないが、たいてい筋違いである。＜すでに古ゲルマン人は…＞と言うのであるから。

この考察が正しいとすれば、この水準においてすでに歴史的関心の特徴があらわれている。その歴史的関心を一皮めくると、そこには重要なメルクマールであるところのものが仄見える。由緒（das Historische）への志向であるが、その歴史とは、史的変遷・展開ヒストリーに向っているのではなく、定かならぬ過去への跳躍である。ファスナハトの時節に前面に出る阿呆座ツフットの組織は、またそのカーニヴァルの活動において今日的な楽しみを作ってもいるが、その組織の中心に位置するのは＜由緒ある（historisch）というスローガンである。仮面は由緒あるものとして謳われる。それは、標し旗しるにも幟旗にも\*プラカードにも＜由緒ある阿呆座ツフット＞（そもそも座ツフットという言い方が由緒づけの肩書きである）と記され、それに続いて古い時期に遡る年号が記される。それらは決してでっち上げではなく、古文書から苦勞して探り当てた成果でもある。つまり、古文書のなかに、古い世紀のどの年代かにファスナハトが記されていることに因んでいる。例えば、貢納に赴いた農民が領主によって焼き菓子の饗応を受けた期日として残っているとといったものである。しかし＜由緒あるヒストリーリッシュ＞というレッテルのなかでは、かかる具体的な結節点はかすんでしまう。ものごとが連続しているとの印象をあたえることになり、独自の価値を謳いあげが、その価値たるや、事実としての歴史展開からは相対的に遊離したものとなる。＜由緒ある＞というスローガンによって、いわば歴史から逸れるのである。

ツーリズムのなかでも、この漠然とした由緒の感覚は培われもすれば、活用されもする。〈ヒストツーリズム〉(Histourisum ヒストリーとツーリズムの合成語)とはいみじくも言ったものである。これには、遠来の訪問客に地元の歴史を案内しようとの努力も含まれる。しかしここでも、かの定かならぬ意味において〈由緒あること〉が一層重要となっている。それは、古く前工業的な相貌に他ならず、またその相貌は、近代の展開に比して、より力強く、より簡素に、より自然にあらわれる。かくして歴史は自然に近づけられる。これは断じて、外来客に向けた演出に留まるものではなく、自己の経験の契機でもある。伝統的かつすこぶる後ろ向きなふるさと観念のなかで、自然と歴史が出遭うのである。

## 7. 規則は生きることの半分

ドイツ人は、ロマンティシズムへの素質、後ろ向き、自然と自然らしさへの熱狂的な信奉者、クラブに組織され、自ら選んだ整然としてくつろげる狭い空間に満足し、同じ所に住み続け、そして酒に強い。もとよりそれは相対的であり、ここで行なった一般化が当てはまる範囲にも限りがあり、相対的であることは、ことさら言うまでもない。それゆえ、ドイツ人の全てに妥当するはずがなく、すべてのドイツ人がこのイメージに沿うわけでもない。しかし、ある程度は現実に当てはまるイメージであろう。しかし、また次のような問いも起きるであろう。そのイメージはいささか粗っぽくはなかるうか？ 焦点の甘いレンズはそろそろ横に置いてはいかが？ 実際、ここで明らかにした特質は、他の特徴を付け加えることによって、議論の価値をもつことになる。とりわけ本書の序章において〈ドイツ人の美德〉のタイトルで触れておいた特徴がそれに当たるであろう。ここで重視するのは、〈規則〉(Ordnung)\* という基本概念のもとにまとめることができるものに他ならない。

この補足を加える必然性については、先にふれた実情に沿えば、あまり複雑にならずに事態が明らかになるであろう。自然の野性味はほどほどである。〈ドイツの森林と自然公園は、自然そのものよりもドイツらしい〉、とはアメリカのウェザーフォードの論評である。それはこう続く。〈狭い道は、自然を味わうにはどう進めばよいかを、はつきりし過ぎるほど教えてくれる。森林には、独特の考え方による休憩場所やちょっとした飲食館や、適度な運動のための小道や、方向指示や危険を知らせるのや説明のための看板が設けられて、どんな人にもルールを分からせる〉。自然な生き方も、感情ではなく、計画が基準になっている。カロリー数や、理想的な体重に近づけることが大きな役割を果たす。裸体主義の賛同者たちの保養地には厳しい境界が設けられ、細かなコントロールの下に置かれて、例えば衣服を着けた訪問客が忍び込む余地はない。クラブは、くつろげる場であるだけでなく、細かい規定を持つ組織でもある。〈常連たち〉は、多数の委員の選出から会計報告

に至るまで、また事細かな予算審議のために、クラブの夕べには大きな部屋を占める。狭い部屋に常に居を構えそこに必要な設備があることは、多数の決まりごとへと延びて行く。地所の境界や通り道をめぐる争いが裁判所を煩わせることも毎度のように起きている。その上、強度の社会的なコントロールができています。とりわけ村落部では、隣人は、規則が守られているかどうか厳しく目を光らせていることが屢々である。家族的なくつろぎもまた、一般的に言えば、細かい計画と規則によっている。それは、決められた食事の時間から、賑やかな式の細かな進行具合にまで及ぶ。くつろぎも規則を無効にすることはない。例えば家族の中での伝統的なクリスマスは、共に寄り添う機会でありながら、同時に夫の妻に対する権威、両親の子供に対する権威を明示する場でもある。

これ以外の観察事例も、挙げ始めれば切りがないほどである。官僚主義の浸透は現代社会の一般的なメルクマールである。複雑な諸関係と対立する利害は、その調整の方策として、ニュートラルな（できる限りニュートラルな、と言うべきであろうが）機関を促進させる。もちろん、官憲の恣意や官僚制度への苦情も一般的である。そうした苦情も、他の国々では、厳しい規程とラフな執行とのあいだの矛盾に向きがちであるが、ドイツで歎かれるのは、規則の過剰、完全主義、手続きの進め方に容赦ないことである。特徴的なのは官庁用語で、それは、非人格的な形式において官庁の権威を強調すると共に、あらゆるものに規則をあてはめ、その規程に穴が無いようにとの意図から、しばしば見渡し難く理解に困難なものとなる。申請や認可の手続きも複雑でひどく手間取る。アメリカの建設会社とドイツの建設会社が競争することをめぐるウィットがある。両者は同時に大きなプロジェクトの計画に着手する。数週間後、アメリカ人からファックスが届く。〈もう10日お願いします。それで出来上がります〉。それと重なるように、ドイツ人からもファックスが入る。〈もう10日お願いします。それで認可がもらえます〉。規則に熱を入れるのは、大プロジェクトだけではない。何でもない日常のことながらもそれは入り込む。アメリカを訪れたドイツ人が驚きと喜びをもって報告することだが、スーパーマーケットでは買った品物を車まで運んでくれると言う。経済関係の政治家がアイロニックにこれにコメントを加える。ドイツでは、そうした行為は労使間の協定からも難しい上に、もし買い物の紙袋が破れれば、誰がその破損に責任を負うのか、先ずはそれを決めておかななくてはならない。

〈規則係り〉(Ordnungsamt)、〈規則違反〉(Ordnungswidrigkeit)、〈規則(秩序)への罰〉(Ordnungsstrafe)、〈規則(秩序)政治上の措置〉(Ordnungspolitische Maßnahme)、これらの言葉もまた〈翻訳不能〉と言いつつではなかろうか。いずれにせよドイツでは、これらは大きな役割を果たしている。それはまた、国家による〈規則の受け負い〉がいかに真剣に受けとめられているかを証している。しかし規則は、あらゆる個人を規程の網の目につかまえる公共の原理であるだけにとどまらない。個々人が自発的に服する基

準でもある。その大部分は計画によっている。外国人が驚くことだが、ドイツ人に会おうと提案すると、カレンダーの日取りと時間計画をどれほど集中的に勉強させられることになることか。即興性の技術はドイツでは発達しない。諸規則から成る関係が一とき逆転し成り行きの的に推移するものであるカーニヴァルの催しですら、分刻みの計画に服する。もちろんこれには、やかましい時間配分が関わっている面もある。数百人が行列にかかわり、数千人が観客として待っているとすれば、理詰めのア配と細かな計画がもとめられよう。しかし、計画魔が一人歩きしている面があることも、種々の指標から十分窺える。

規則の原理に関連して、動物に対するドイツ人の関わりにもふれておかななくてはならない。ドイツ人の家庭のほとんど半数には、少なくとも一匹の動物が飼われている。最も大きな比率を占めるのは猫で、全体の40%弱にもなる。動物を飼うとは、人間が自然の一部を家のなかに取り入れることである。すなわち、文明化されていないもの、計算し尽くせないもの、自然発生性である。籠に閉じ込められた小鳥（動物を飼育する家庭の優に10%）や魚類（これは同じく12%を超える）が計算できない存在のまま多少放置されるのを別にすると、他の動物のほとんどは、まるで生きた縫いぐるみか、もしくは義務に忠実な家族の一員か、どちらかである。後者は特に犬がそうであり、しばしば厳しい調教が加えられる。特殊な位置にあるのはドイツの牧羊犬で、これはかつて収容所に導入されたために、いかがわしい意味でドイツのシンボルになってしまったが、その調教は昔も今も重要な意味をもっている。すでに帝政時代にも、調教師組織のスポークスマンは、牧羊犬のしつけを子供の教育や兵士の訓練になぞらえた。曰く、犬は、システマティックにトレーニングすることによって、人間と共に生活の中心的な課題に引き入れることができる。犬もまた規則の証人たるべきなのである。

<神は規則（秩序）を嘉し給う>。<規則が世界を保つ>。<規則が家政を助けてくれる>。ドイツ語の諺では、規則が重要な位置を占める。もっとも、これは、規則をいくらか軽いところに分類する議論にもなる。なぜなら諺は言語の古いジャンルであり、今日のあり方を予定しているわけではないからである。しかしそう言ってしまうほど、事は簡単でもない。<規則は生きることの半分> (Ordnung ist das halbe Leben) という諺があるが、作家のルートヴィヒ・ハーリッヒ\*はさらに思い入れを深くして、こう言った。<規則は生きることそのものだ> (Ordnung ist das ganze Leben)。この表題の下に、彼は自伝の一部を記述した。それは、父親との関係の部分である。作家の父親は、厳格な教育方法を以って息子に向かい、息子を規則に慣れさせようとした。このテーマは他の言語の文学にも見ることができる。父親と息子という構図は、小説の最も生産的なモチーフの一つでもある。また、最近のドイツ文学では、このテーマが、ナチズムの過去との対決に取って代わっているところがある。これらすべてを考慮して、驚くのは、ドイツの作家た

ち（男性も女性もだが）にとって規則の問題がいかに中心的であるかということである。ほとんど常に描かれるのは、感じやすい若者で、それは多くの場合作家自身であるが、悩み、そして押しつぶされる。その原因は、何もかもが規則と言う教育目的のもとに投げ込まれるからである。鍛錬、勤勉、時間を守ること、几帳面、儉約、これらすべてが規則に奉仕すべく厳格に決められるからである。

規則が好き、勤勉、仕事の能力、鍛錬、清潔、ドイツ人に自己評価をもとめると、昔も今もこれらが最上位に据えられる。もっとも、外部からの評価は、やや異なったものとなる。しかしその場合でも、ドイツ人のその都度の自己評価が、対比的な出発点の意味を果たすのは当然である。やや古い質問を用いることになるが、オランダ人の目（すなわち強度のピューリタニズム）から見ると、ドイツ人は違った光を当てられる。規則の好きなドイツ人ではなく、むしろ、羽目を外すことが多く、綺麗好きでもないとされる。しかし全体としては、ドイツ人は、几帳面で、せせこましく規則を気にかけているという見方が強い。数年前に、トルコ人の女性教授が、私たちのテュービンゲン大学で招待講演を行なった。彼女は、僅かに遅れて到着した。私は、駅から直接、講演が行なわれる予定の建物へ向った。講義室は規則通り（この規則通りということが肝心だが）予約していた。しかし何か行き違いがあったらしい。講義室はふさがっており、中では他の講義が行なわれていた。そして、招待講演に興味のある参加者は外で、戸惑いながら所在無げに待っていた。まことにばつが悪い状況だった。私は、トルコ人の教授をなだめるために、即座に頭の中で、言葉を尽くしてお詫びをする準備をした。しかし彼女は、作りものでもない朗らかさで答えたものである。空港に着いたときの検査は手間取った、列車は時間通りではなかった、そして今度は講義室の不調 — これらすべてが、規則の模範国で起きたとなると、この国は新しいアイデンティティを提示しつつあるようですね。

ドイツが規則の牙城と見られていることについて、小話や、実際に触れる証拠を続けて挙げるのはたやすい。これが、部分的には、知覚上の選択とパースペクティブの狭まりの産物でもあることは確かであろう。ドイツのテレビは、多数の探偵ものを製作している。それらの作品では、さまざまな状況が設定され、またその登場人物たちも決して判で捺したようなものではない。〈規則の要員〉、つまり警部や警官は小さな欠陥をもっているのが普通で、犯罪すれすれのところまで進むほど柔軟である。それでいながら警部デリック\*は、このジャンルにおける正にドイツ大使として、単調な自己規律のなかに身をおいて、何が命の次に大事であるかを明らかならしめる。そうした場面作りを支えているのは、一種の紋切り型であるが、そればかりではない。事実としてドイツ人が規則においてファナティックであること示す事例はもっと挙げるのは、難しくはあるまい。それに引きかえ、それを説明するような根拠を見つけるのは難問である。

厳格な規則尺度の形成は、屢々工業化と結び付けられる。ベンジャミン・フランクリン\*の言葉“Time is money”は、そうした展開の里程標とされる。厳密な機械的な時間区分を、工場の組織は促進し、機械設備が可能にした。工業化が、規律化を強く推進したことは疑えない。村落出身の労働者にとっては、その切り替えはひどく重荷であり、また労働現場での頻繁な配置換えには、工業化の初期にはそうした難しさがつきまとった。しかし、工業化の進展からはドイツ的な特殊性を導き出すことはほとんどできないことを別にすると、＜市民的な美德＞のキーワードの下にしばしばまとめられるものは、既にそれ以前から形作られており、今日では、それは産業革命の結果というより、その前提であったと見られている。

歴史家パウル・ミュンヒが多くの例証によってまとめたところによると、規則という指針は、それに属する指示項目である勤勉や自己規律や儉約や自足とともに、工業化の勃興に先立って発展し定着していた。1600年頃でも諸国民の比較となれば、ドイツ人は、すこぶる規則性に欠ける同類として登場する。規律を知らず、酒飲みで、楽しみばかり追っていることが特筆されるのである。しかしやがて、調教の動きが始まった。ドイツではそれが他の国々よりも顕著であったが、家政、規則、家庭内はもちろん、家屋敷やそれに属する下男下女たちも含めた家内での心掛けに向けて矯正は進行した。教会堂での説教、道徳のパンフレット、寓話、詩歌、諺を通じて、無規則や怠惰や放恣がいかにか毒するところが大きいか、逆に規則や勤勉やつつましい生活がいかにか祝福されるものであるかが教えられたのである。その際、キリスト教の論議が経済的思考を支援するかたちになり、最後は啓蒙主義の信条にたどり着いた。曰く、規則（秩序）は理性的にして有益である。

以上は、発展過程を簡単になぞった。しかしそれにしても、何故、ドイツでは規則を、屢々、ほとんど熱狂的なまでに高く評価することにつながったのであろうか。その点で非常によく行なわれるのは、マックス・ウェーバーの理論\*の航跡を追うことである。すなわち、規則への志向と労働の感性を専らプロテスタンティズムとピューリタニズムの影響に遡らせる見解である。そのアクセントの置き方は間違いではない。カトリック教会圏の諸地方では、今日に至るも一部では、規則に対するラフな考え方や、規則にやや厳密性の不足した付き合い方がみとめられる。しかしプロテスタンティズムのなかでも、考え方に厳格性が増すのは時間をかけて徐ろに進行したのである（ルターは、聖書に依拠しつつ、労働に呪詛を見ていた）。それは問わないにしても、規則と勤勉を称揚する書き物には、多くカトリック教会系の著者が見られるのである。ドイツの特殊性は、その後の宗派抗争がプロテスタントとカトリックの両宗派間の司牧面での競合を激しくし、それが道徳的な戒めと対処において表れたことにもとめられる。その営為はまた、部分的には、規則に即した諸関係と規律ある考え方を臣民のあいだに植付けようとの国家の方針とも重なった。規

模の小さな領邦では、かなり早くから強力な官僚制ができ、時局的な変化を先延ばしし、あらゆる手段をもちいて現存の規則をまもることに力を注いだ。フリードリヒ・リスト\*は1820年の意見書のなかで、<sup>フォルク</sup>官中心の経済が民に大きな負担を強いていることを叙述した。〈見渡す限りそこに目にするのは何でありましょうか。参事、役人、事務吏、役所助手、書記、記録所、書類の束、役人の制服、上級務めの者たちの富裕と贅沢、そして奉公人に至るのでありますが、それ以外には何もございません〉。リストの説くところは不興を買い、この重要な国民経済学者がアメリカへ逃れなければならない原因をつくってしまった。

臣民の依存性と、それに加えてお上への恭順が、ドイツ社会を、他の西ヨーロッパ諸国とは異なるものとした。他の国々では、市民的な規則の形成に際しては、政治的な自由権が中心であった。ドイツでは、そうした権利を要求した者は、結局、当てのない戦いをすることになった。あるドイツの革命家がフランス外務省に宛てた秘密報告には次のように記される。

<sup>フォルク</sup>民は集団のまま聖職者や名士たちへの依存に慣れており、自らを解放しようなどと簡単には動きません。民は、それが人間の権利であること理性によって見たとしても、その想像力はあまりにも恐れにとらわれています。その恐れは、最初の教育において、神への恐れとお上への服従という仮面の下、植え付けられてしまっているものであり、自己を解放する着想をもつことなどありません。

<sup>フォルク</sup>民の総体が畏怖をいだいていた。のみならず、オピニオン・リーダーたちも、たいてい、古き規則を指示し、あり得べき新しい自由を指示しなかった。教育家ヨーハン・ハインリヒ・カンベ\*は、自分の娘のために自ら著した「父親の教訓」を刊行したが、それは彼女に規則への愛を覚えさせ、規則の価値を認識させるためであった。〈物事への規則、仕事への規則、人間の考え方と行動の仕方すべてへの規則〉。とは言え、刊行が1789年であることを取り上げて、この教本をフランス革命に対応するものと見るのは短絡である。父親の助言という形での教育教本は、フランスでも必ずしも社会転覆へつながるものではなかった。しかし傾向から言えば、対抗するものがこういう形で明るみに出たとは言い得よう。この一年後に、カント\*は〈勤勉、潔癖、儉約〉の故にドイツ人を賞めたが、そこに次のように補足を加えた。ドイツ人は〈規則や決まりへの愛着によって、改新に向うよりは……圧制を甘受してしまう〉。次に取り上げる話題は、さらに数十年後のことである。すなわち、ドイツの諸国家でも民衆のかなりの割合が厳しい支配規則に反抗し始めた時期に、フランクフルトの医師ハインリヒ・ホフマンが『もじゃもじゃ頭のペーター』を刊行した\*。最も成功した児童書の一つであるが、韻文による一連の物語に挿絵を付けた体裁で

あった。そこで示されたのは、規則を冒すとどんな悪い結果になるかが、ドラスティックな挿絵によって示された。学校の読本もその点ではまったく同じで、規則に適う行動の道徳的価値と有益を教えることにおいて盛り沢山であった。

しかし、学校は、規則が教えられ叩き込まれる唯一の場所ではなかった。軍隊も同様に重要であった。ノルベルト・エリーアスが代表する見解によれば、ドイツの諸国家はひ弱で、外国の軍隊の餌食になってきたが、そうした国家の弱さを目の当たりにしていただけに、却って＜軍隊的な行動と戦争行為を理想化して高く価値づける＞ことを誘ったとされる。これには異論の余地もあろう。民衆は、自国の軍隊にもやはり苦しめられたからである。それに、軍隊も支配者の利害によってしばしばその立場を変えたため、祖国を思う心情を代表する性格は極めて限定的であった。しかしまた19世紀始めの解放戦争\*では、民衆は軍隊と自己をかなり強く同一視した。次いで1870-71年の普仏戦争\*が＜軍事行動の過大評価＞を生み出したことは確かであり、しかもそれは帝政時代を通じ、さらに部分的にはそれ以後も基準的な物の見方となった。これに加えて予備役の士官となった者の存在がある。例えば第一次大戦の勃発時にはそれは約12万人を数えたが、彼らは、市民生活のなかでも甚大な影響力をもつ共に、その経歴によって出世の可能性をも持っていた。市民的秩序が軍経験者や軍隊の構造にどれほど大きな信頼を寄せるかについては、カール・ツックマイヤーの戯曲『ケーペニックの大佐』\*がよく教えてくれる。

＜規則が好き＞は、夙に家庭から政治へと広まりを見せていたが、また大半のドイツ人をナチスの軍隊に赴かせたのもこれであった。その同時代人の思い出からも明らかだが、ナチ党の計画され整然と遂行される規則的行動が選挙民を惹きつけた面はあったのである。それだけでなく、体制の下でどこまでも延びて行く権力政治の目標設定においても、規則（秩序）、さらに新秩序の考え方がプロパガンダのなかでも常に表面に押し出された。もっとも、規則という思念は、凄惨きわまる行為の隠れ蓑ともなった。＜働けば自由になれる＞（Arbeit macht frei）、これは収容所の門に掲げられたスローガン\*であったが、拘束されている者には途轍もないシニシズムであった。このスローガンがその場所に取り付けられたのは、その施設もまた＜規則（秩序）＞を構成する一部であったことから説明できよう。しかも規則は、規則（秩序）の境界外にあるあらゆるものに対するシステムティックな殲滅作戦において頂点に達したのである。

ここまで見れば、さすがのドイツ人も寛容性を欠いた<sup>たかぶ</sup>昂った規則概念を脱却したであろうとの期待が起きよう。ところが、事実は必ずしもそうではない。選挙の宣伝では、理性的な規則観念（カオスは最後の所では特に魅力的な目標ではない）にまぎれて、特定の分野に関する限りいかなる犠牲を払ってでも規則を貫くとの公約も常に顔を見せる。＜アードルフの下でも、これは無理だったろう＞との発言が、乱暴なイロニーばかりではないの

は残念なことである。よく知られているように、あるドイツの首相は辞任を余儀なくされたが、それは彼が戦争の終る直前の時期に、軍法会議の判事として、彼の見解では〈規律と規則に違反した〉（抵抗に立ち上がった、と言うべきであつたらう）一人の水兵を処刑させたからであつた。それだけでなく、彼が、当時は正しいとされ、今日では正しくないとされる考え方をもっていたからでもあつた。そうした発言のなかで、ナチズムの精神はなお命脈を保っている。そればかりか、その精神は、ドイツでは正義と規則を法の上におくことすらあつた古くからの伝統にも根をもつのである。

## 8. 冗談が分かるの？

〈冗談が分かるの？〉。あるテレビ番組のタイトルである。その番組では、〈隠しカメラ〉（似たような番組でこれをタイトルにしているものもある）が仕掛けられたなかで、登場者たちは難しい状況と緊張した心理におかれ、しかもその反応が広く視聴者にさらされる。工場から出荷されたばかりと言ってもよい純白の乗用車が洗車フードのなかに入っていくが、出てきたときは車体がピンクに染まっている。人気のない山道で監視人が現れて、山歩きの人間から法外な通行税を徴収する。保養地の高級ホテルのスイート・ルームをずっと前から予約していたのに、着いてみるとふさがっており、代わりに掃除道具をしまっておく黴臭い部屋があてがわれる。どれも無茶な話であり、冷静な人間でもかつとなる。企みが解明されるまでは怒りをおさえ切れない。この番組はたいそう人気がある。その理由として、ドイツのユーモアの特殊性が取り入れられている、という人もいる。つまり意地悪い喜び\*が頭をもたげる。笑いは、場面の推移にのみ当てはまるのではない。同時に悪意をただよわせた効果音の高笑が上から下へ降り注ぐ。しかしここで注意を要する！こうした番組のタイプは、その多く（特に娯楽番組の多く）と同じく、アメリカからやってきたのである。問題の多い状況に誘い込まれるのは、たいてい有名人である。彼らは、そのシーンを通じて尊敬を失うことはない。むしろ、彼らとその企みを最後は悪くは受けとめず、自己の本性を放映にさらしたが故に視聴者からは感心される。

これはかなり一般的な問題であり、ある一面、あるいは他の一面だけで説明できない。ドイツ人にユーモアが分かるの？ そもそもこういう問題の立て方がゆるされないことは言を待たない。ドイツ人と言えば、気難しい人間しかいないとか、陽気な人間しかいない、などといったことを誰もまじめに言い張りはしないであろう。ドイツ人にはユーモアが無い、とはよく耳にし、また読みもするが、そこで考えられているのは、日常はもちろん、非日常的な災難をも朗らかなアイロニーのなかで処理する人間が、ドイツでは一般の枠からははずれるということであろう。人生はまじめなものであり、陽気に機転をはたらかせ

て人生を乗り切るのは、やはり例外的とされるであろう。

<ユーモアが無い> は、やはり賞賛ではなく、非難と受けとめられよう。もつとも、概括的な判断を反対の証拠で骨抜きにする芽も常にありはする。例えば、一般に流布している多数のウィットを挙げてよい。スナックで交わされるウィット、新聞や雑誌に載っているウィット、パンフレットや本のウィット。多くのウィットは地方的なデータともなっている。それ自体は、他の国々でも珍しくはない。しかし、ドイツではそれが特徴として強められているのは確かであろう。<インターエスニックな> ウィットは、労働移民の大量流入の後でも中心的な役割りを果たしていない。あるいは、北米ではエスニック・ジョークが溢れているのを見ると、ドイツの場合は、まだ中心的な役割りとはなっていない、と言わねばならないのであろう。北米では、遅くとも20世紀の初めから、非常に多くの移民グループがそれぞれの出身地をはなれてあつまり、相互に相手を攻撃的な嘲笑的の的にしてきた。しかしUSAの状況は基本的にドイツより多彩である。それに加えて、ドイツ人は、昔も今も、地方ごとの差異を、それが事実であれ、観念だけのものであれ、その差異を抛り所にしてウィットを飛ばすことに熱心である。

昔風のを挙げるなら <部族のからかい> として語られてきたものがある。ドイツのさまざまな国や風土の住民の間でのひやかしや愚行のあげつらいで、ウィットのレパトリーとして重要な部分である。その大半は、隣人の中での嘲りに他ならない。バーデンの人々が面白おかしく語る <シュヴァーベン・ウィット> はその一例で、バーデンとヴェルテムベルクが統合\*した後さらに鋭くなった観すらある。しかし嘲りは、非常に遠隔になっても機能する面もある。プロイセン人(たいていはベルリン人だが)は、バイエルン・アルプスで夏の休暇を過ごすあいだ、尊大で、地元の農業の事情などはお構いなしの振る舞いをする事から、すでに19世紀末にはウィット・ジャーナルの好みのテーマとなった。それによって大都市のツーリストという新しいタイプをカリカチュアに仕立てることができたからであるが、それだけでなく、プロイセン主導の帝国が成立した後さらにむしろ先鋭化したバイエルンとプロイセンの敵対が止揚されることになるからでもあった。ザクセン人は、ドイツのあらゆる場所でウィットの人物像として正に商品化された観がある。ユーモアの感覚に乏しい人々が、ドイツの統一後は、これを盛んに使った。壺を得ていようと場違いであろうと、ザクセン方言のパロディーが横行している。コミックのなかでのザクセン人の擢<sup>ぬき</sup>んでた位置は、最近の世相の産物にとどまらない。東ドイツ時代にもザクセン・ウィットが語られたが、その向かう先は政府の諸機関であった。それらはザクセン人の役人に占められ、ザクセン弁に染まったドイツ語が新たな標準語になる勢いだったのである。さらにその前から、ザクセン人の生き方や、特にザクセン弁は、コミカルな効果を挙げることに請け合いとなっていた。それは、流行歌であると、安っぽい取り違えのウィッ

トであると拘わらなかった。前者の一例：〈マックス、お前が団子（タンゴ）を踊るなら…〉。後者の一例：〈ローマ人とギリシア人の違いはどこにある。ローマ人からは酒が飲める。そこへザクセン人が口を出す。なんでギリシア人から飲めねえだ？〉\* どうしてザクセン人がそれほどコミカルな分野に入り込むことになったのか、それは簡単には説明できない。『ドイツ・ウィットの小地理学』の著者ヘルベルト・シェフラーは、ザクセン人がイデオロギー過剰であったことを挙げているが、その際、戦後はマルキシズムの申し子であったことにはほとんど思いあたらなかったらしい。むしろ、17世紀から19世紀にかけて、ライプツィヒやドレスデンやヴァイマルが精神的・藝術的に指導的な位置にあったことを考えている。加えて、工業化においてパイオニアであったことも回顧される。ザクセン人は、一種の嫉妬をもって仰ぎ見られたのである。それだけに、古い栄光が色褪せ、ザクセンが市民的ななつかしい場所になり下がると、代償的に優越感を以って見るようになったと言う。

しかし、その起源説明では、必ずしも辻褄が合わない。つまり、ウィットの〈<sup>ま</sup>と

なるのは偶然のこともあり、そうして作られたコミカルな関係がしゃぶりつくされるといった観もある。その最適の事例は〈東<sup>オスト</sup>フリースラント・ウィット〉であろう。それは、1970年頃から出回り、鼠算式に増えつづけ、新しいウィットのタイプとなった。ブロンド・ジョーク\*はその一例である。その拡散の過程が示すように、これらのいわばウィットのなかのウィットは、部族特性のなかにあるのではない（さりとて、まったくの偶然でもないであろうが）。また、現代の恩恵にさほど浴さない、寡黙な人間種が、ナイーヴな発言やコミカルな行為の張本人とされたことも分かる。その槍玉に挙げたのは、先ず東<sup>オスト</sup>フリースラント・ウィットで、断片的な報告を信じるなら、その先鞭をつけたのはブレーメン放送局の司会者たちであった。彼らは、デンマークの先例、すなわちオーフス・ウィット\*に倣ったのである。またそれが示すのは、地方的なウィット像は、そのなかに地方の人間らしい性格が結晶していることの証人ではないことである。シルダ\*はどこにでもあるわけである。

多くの国々では（多少誇張して、世界中どこでもと言うことすらできよう）、土地がからかいの対象となってきた。今もそうである。その土地の市役所や市民の愚行が嘲笑われる。ドイツではそうした土地は数多い。シルダ市民の話が特にシュヴァーベンで広くおこなわれているのは偶然ではないであろう。狭い小さな町村体、それは見紛う方無き（同時に小心翼翼たる）支配の仕組みと一体であった。住民が数百人程度で、しかも裁判権をもった幾つもの帝国都市を考えてみればよいが、そこでは、奇妙な裁断が起きる可能性もあった。しかしまた、愚昧な市民を描いた民衆本の成功は、当時、人々が物ごとを面白く見る視点へと開かれていたことをも示していよう。笑話の書冊はベストセラーでもあり、

オイレンシュピーゲル\*の数々のいたずらによって、ドイツ文学は輸出に堪える品目を提示した。イタリアの人文主義者たちの諧謔に富んだ話し振りのような洗練された機転は、ドイツではほとんど知られなかった。ヨーハン・フィッシャルト\*の大仰な語り口を先達にして模範にあたるラブレー\*と比較すると、フランス人の高度かつ様式美をそなえた巧緻がひときわ目を射るであろう。しかし、ドイツでも中世から近代への過度期には野太く、時に粗雑、そしてたいてい人のよいユーモアは、時代の相貌の正面に位置していた。その時期、ドイツでは、力強く影響力に富んだ都市市民層が形成されていたのである。

文学史をさらに数世紀なぞってみると、ことユーモアに関しては、ドイツのバランスシートはジリ貧をたどった。ハンス＝ディーター・ゲルフェルトは、イギリス文学との比較を細部にわたっておこなう貸借対照表を作って、結論をテーゼの形で言いあらわした。〈国民のなかに市民社会の度合いが強まれば強まるほど、笑いは、社会のなかでより大きな場所をとるようになる〉。ドイツでは、自由な心情の市民社会を展開させることができなかつた。そこでこうも言われる。幾多の大きな戦争の圧迫下で、戦争と戦争のあいだの困窮のなかで、臣民としての従属の位置にあるなかで、笑いはドイツ人から失われた、と。少なくとも、昂揚した気分の笑いは失われた。大戦争を背景にしたグリムメルスハウゼンの悪漢小説\*はその例証だが、自由な冒険欲とニヒリズムに接した陽気が道徳的・宗教的な基準に繋がれ引き戻されてしまっている。ドイツで開拓され成功を取めるところのものは、人間の弱さをカリカチュア的に槍玉に挙げるヴィルヘルム・ブッシュ\*風の教化的なユーモアである。他面では、諦めのユーモアであり、すなわち諸関係の未完性を突きとめ、そこからコミカルな収益を引き出すが、最後は薄笑いを浮かべつつこの未完性と折り合うのである。

しかしこれは、社会的な様相ではなく、どちらか言えば文学の位相である。ドイツ人がユーモアが無いと言われるとき、それは文学研究に踏み込んだ話ではなく、日常の付き合いのなかで軽やかさやある種の緩みが欠けていることを決まって指している。絶えずジョークが飛ばされ、さながらウィットのインフレーションの観を呈するとしても、それは少しも矛盾しない。ウィット無きジョーク・コレクターもいる。ジョークを次々に紡ぎ出す人のなかには、〈着想の魔法ペン〉とでも言うべき人もいる（因みにこの言葉はカール・クラウス\*の言い方である）。ところが、次々に繰り出されるウィットも、笑いの効果にも拘らず、朗らかな儀式というより屢々必死の儀式となっている。ウィットの心臓部に、しぶとい生真面目が復讐さながら突き入ることも珍しくない。ドイツ皇帝は、『ケーペニツクの大佐』のウィット的なトリックを評してこう述べたものである。〈鍛錬とは何か、それがまことによく分かる〉。カーニヴァルの催しものも、もとは軍隊の習慣のパロディーであったが、厳密に規則的な一連のプログラムとなって久しく、しかもそこにはクラブの

ヒエラルヒーがきまじめに取り込まれている。最後にもう一例：ハインリヒ・ベル\*は、ポーランドの作家仲間であるタデーウス・ノワコフスキー\*に、ドイツで壇上に上がる時には、ウィットを一つはさむように助言した。それは拍手で迎えられたが、まもなく一人が発言をもとめて尋ねた、と言う。〈先生はそれをどういう意味でおっしゃったのでしょうか〉。

この小話は、コミカルな中身であれ想定不能なものに身をさらすに当たって、ドイツ人がどんな安全ベルトを締めているかを意味している。ユーモアは禁じられてはいず、むしろ願わしいものですらある。しかしそれは、真面目な人生からまったく切り離されているか、それとも真面目に解けるようにつくられているか、どちらかでなければならない。アイロニーは、ドイツではほとんどとめられない。それは〈非本質的な話し方〉と規定されてきた。と言うことは、ドイツ人は本質的なものをもとめるのである。何かにかかずらっているとき、それが真面目と不真面目を入ったり来たりしていることが分かると、問題がある、ということになる。リアリティな現実の多義的あるいは予測不能な側面とたのしみながら取り組むのは、特徴としては弱いのである。これには、あまり必然性がないまま集まったり軽い会話がほとんど開拓されてこなかったことも関係していよう。Small talkは実際に口にされはするが、社会の重要な潤滑油として評価されてはいない。ハンス＝ディーター・ゲルフェルトの指摘するところによれば、イギリス人はこの上なくまじめな顔付きでユーモアを口にしますが、ドイツ人はユーモアを飛ばすときには満面に苦笑いを浮かべて、聞き手が導かれるのがどの領域であるかを必ず区分する。つまり、笑ってもよいか、笑うべきかを指示するのである。ジェローム・K・ジェロームは、ドイツでも百年来読まれてきた小説『ボートの三人男』\*のなかで、この差異を活用して愉快な場面を設定した。二人の若い男が歌手を演じる。歌手になった者は、大層コミカルなドイツの歌と銘打って、悲壮きわまる顔付きで歌いあげる。イギリスの観衆は公演を大いに楽しみ、爆笑で応えた。しかし、それは歌い手をいたく傷つけた。なぜなら、実際に歌われたのは悲しい歌だったからである。それが分かった後（ここを作者は強調するが）再演されるや、ドイツ皇帝は子供のように泣きじゃくった。

1920年代に刊行された大部なコレクション『ドイツのユーモア500年』のなかで、編者は冷静な筆致でこう記す。僅か数ページの序文を〈ユーモアとは何ぞやと問うて何種類もの定義で埋める煩は避けたい〉。しかし、〈コミカルなものの背景を探る〉ことは心掛けよう、〈多くの人々にとって、ユーモアはお喋りという自足以上には深みを意味しない。要するに、まったく問題の渦中にあっても裏切られるおそれのない世界である自宅に隠れ処を感じ、日常から敷居を超えて流れこんで来る不調和を笑で跳び越えるものとしての自足である〉。まことに重みのある言葉であるが、ここからは、ドイツのユーモアにおいて第一にもとめられるのが何であるかが明らかになる。深みである。ゲーテは

『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』\*のなかでこう記した。〈ドイツ人の性格：どんなことにも重くなる、つまりどんなこともドイツ人にかかると重くなる〉。ユーモアの理解においてすら、そうした重みの傾向がみとめられる。軽く現れるものは、関係性を欠いた薄っぺらなものとの嫌疑を受ける。早くレッシング\*が、その象徴詩に、読者に向けて次の警告を付けたのも、この故であった。

エピグラムが、長く盛りだくさんで重くなければ  
気に入らないという読者よ  
弓で矢を射る代わりに  
弓に槍をつがえるのをどこで見たと言うのか

そうは言うものの、軽みに対する不信感の種を蒔いたのもレッシングであった。戯曲「ミンナ・フォン・バルンヘルム」\*では、実直なドイツ人大佐タルハイムが際立っており、言葉の一つ一つを選ぶほどであるが、片やフランスの宮廷人リコー・ド・ラ・マリニエールは軽薄そのものといったお喋りにブレーキがかからない。ヴィッツ（ウィット）という言葉は、当時、なおフランス語のエスプリ (esprit) に対応していたが、それにも警告がおこなわれた。〈ウィットが理性よりも大切だという国の嘆かわしいことよ〉、1789年にこう書いたのはシューバルト\*であった。要するに、深みを勧めるのである。これは定義するとパラドックスにもなる。まじめなユーモアであり、それはドイツとフランスの対比に沿い、しかもそれはドイツ人の自己像の形成において重要な役割りを果たした。

ふざけ、ウィット、ユーモア、これらの解明は、どうしても規則をめぐる議論の一翼となる。徹底性や根本を極めようとするドイツ人の傾向は、コミカルなものの母体である誤解や齟齬に彩られた付き合い方を、いわば遮断してしまう。フランスの通訳で外交官のブリジット・ソゼは、ドイツ人の定義への熱狂ぶりを茶化した。彼女のコメントによれば厳密な決め方や整理や区分けはすでにそれだけで朗らかな中間音のチャンスを縮めている、面白いだけの会話などはめったにない、成功した娯楽小説はベストセラーのリストに挙がるものの口うるさい文藝欄では扱われない、陽気なテレビ番組も学者が取り上げないわけではないが、偶然、場違いなチャンネルに入り込んだ観がある、等々。ドイツ人が見せるそうした差異は、これまた歴史がある。〈大衆文化〉は、批判され攻撃を受けながらも、新しい技術の可能性と余暇の拡大に支えられて一貫して広まりはした。〈余暇〉の概念を〈意味のある〉活動にとりおこうとする試みも、とりわけ教養に向けた真摯な努力に振り向けるべきとの試みが、何度も繰り返されたことによって、実際にはチャンスを得ずに終わった。

そうした傾向のなかで表面化するリゴリズムは、それ自体、ユーモラスな物の見方に道を開くところがある。誰も彼もが、中央の水路を一緒に泳いでいるわけではない。ドイツにも批判的な人々は常におり、道徳的狭隘、規則へのファナティズム、原理への喜びを諧謔をこめて槍玉に挙げてきた。そうしたドイツ的なユーモアとの対決に属するものには、ハインリヒ・ハイネ\*の評価も入るのではなかろうか。リングルナッツ\*やクルト・トウホルスキー\*やエーリヒ・ケストナー\*といった詩人たちも、この脈絡で想起されて然るべきではなかろうか。ローベルト・ゲルンハルト\*の成功や、息長くつづくキャバレーの意味合いや、多くの新聞・雑誌に印刷された辛口<sup>カリカチュア</sup>の戯画は、ユーモアの欠如（このユーモアのかけらもない無粋な言い方！）というレッテルに抗するものではなかろうか。

ここで描いたスケッチが、好意的な面からのあれこれの修正を要するであろうことは認めよう。しかしそうした修正も、アウトサイダーの名前を挙げるのは容易ではないであろう。とは言え、アウトサイダーはいたのである。ハイネについては改めて証明の要はあるまい。リングルナッツやトウホルスキーやケストナーは、律儀な文学史をちらっと見れば明らかだが、＜まともな作家＞とは決してみなされず、三文文士、ジャーナリスト、へぼ詩人といった評価である。もっとも、今日のユーモア作家たちとなると、事情が違ってくる。彼らが書き、反応し、スケッチをしている社会と世代とは、しばしば次の問いが投げかけられる社会や世代でもある、＜冗談以外に何か分かるの？＞。この問題は、最後の章でやや詳しく取り上げよう。

## Literatur

### II. Nationale Eigenheiten auf dem Prüfstand (国民性の検証)

1. Nationalspeisen – Anmerkungen zum Essen und Trinken (お国料理 — 食と飲み物への寸評)  
Hartmut Heller, *Wein oder Bier? Volksgetränke vor dem Hintergrund wechselhafter Produktions- und Nachfragebedingungen*. In: Otto Koenig 70 Jahre. Kulturwissenschaftliche Beiträge zur Verhatensforschung. Wien, Heidelberg 1984, S.285–297.
- Konrad Köstlin, *Der Eintopf der Deutschen. Das Zusammengekochte als Kultessen*. In: Utz Jeggle u. a. (Hgg.), *Tübinger Beiträge zur Volkskultur*. Tübingen 1986, S.220–241.
- Claus-Dieter Rath, *Reste der Tafelrunde. Das Abenteuer der Eßkultur*. Reibek 1984.
- Hans-Jürgen Teuteberg/Günter Wiegelmann, *Unsere tägliche Kost. Geschichte und regionale Prägung*. Münster 1986.
- Günter Wiegelmann, *Alltags- und Festspeisen. Wandel und gegenwärtige Stellung*. Marburg 1967.
- Alois Wierlacher, *Vom Essen in der deutschen Literatur. Mahlzeiten in Erzähltexten von Goethe bis Grass*. Stuttgart etc.1987.

**2. Eng und wohl . . . . .** (狭いながらも心地よいのが……)

Michael Andrizky, Gert Selle (Hgg.), *Lernbereich Wohnen. Didaktisches Sachbuch zur Wohnumwelt vom Kinderzimmer bis zur Stadt*. 2 Bde. Reinbek 1979.

Hermann Bausinger, *Räumliche Orientierung*. In: Nils-Arvid Bringeus u. a. (Hgg.), *Wandel der Volkskultur in Europa*. Münster 1988, Bd. 1, S.43–52.

Hermann Glaser, *Kleinstadt-Ideologie. Zwischen Furchenglück und Sphärenflug*. Freiburg i. Br. 1969.

Edward T. Hall/Mildred Reed Hall, *Hidden Differences*. Hamburg 1983.

Edward T. Hall/Mildred Reed Hall, *Verborgene Signale*. Hamburg 1983.

Jack McIver Weatherford, *Deutsche Kultur, amerikanisch betrachtet*. In: Tintenfish 15. Thema Deutschland. Berlin 1978, S.82–94.

Oskar Negt, *Blick zurück nach vorn. Brüder Grimm: Der Wolf und die sieben Geißlein*. In: *Freibeuter* 5, 1980, S.117–125.

**3. Seßhaftigkeit und Reiselust** (同じ所に住み続け、そして旅行が大好き)

Hermann Bausinger, Klaus Beyer, Gottfried Korff (Hgg.), *Reisekultur. Von der Pilgerfahrt zum modernen Tourismus*. München 1991.

Bundeszentrale für politische Bildung (Hg.), *Heimat. Analysen, Themen, Perspektiven*. Bonn 1990.

Alan Dundes, *Life is like a chicken coop ladder*. New York 1984 (deutsch: *Sie mich auch! Das Hintergründige in der deutschen Psyche*. Weinheim/Basel 1985).

Gert Raeithel, *Antiamerikanismus als Funktion unterschiedlicher Objektbeziehungen*. In: *Englisch-Amerikanische Studien*, 6 (1984), S.8–21.

Stiftung Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland (Hg.), *Endlich Urlaub: Die Deutschen reisen*. Köln 1996.

**4. Es geht nichts über die Gemütlichkeit** (くつろげるのが何より)

Jürgen Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit*. 3. Aufl., Neuwied, Berlin 1968.

Karin Hausen, *Die Polarisierung der „Geschlechtscharaktere“*. In: Werner Conze (Hg.), *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas*. Stuttgart 1976, S.363–393.

Utz Jeggle, *Schöne Bescherung*. In: *Allmende*, 1 (1981), S.1–23.

Herlinde Koelbl/Manfred Sack, *Das deutsche Wohnzimmer*. München/Luzern 1980,.

Heidi Rosenbaum, *Formen der Familie*. 7. Aufl. Frankfurt a.M. 1996.

Richard Sennett, *Verfall und Ende des öffentlichen Lebens. Die Tyrannei der Intimität*. Frankfurt a.M. 1986.

Margret Tränkle, *Wohnkultur und Wohnweisen*. Tübingen 1972.

Martin Warnke, *Zur Situation der Couchchecke*. In: Jürgen Habermas (Hg.), *Stichworte zur „Geistigen Situation der Zeit“*. Bd.2. Frankfurt a.M. 1979, S.673–687.

Ingeborg Weber-Kellermann, *Saure Wochen, Frohe Feste. Fest und Alltag in der Sprache der Bräuche*. München/Luzern 1985.

**5. Drei Deutsche: ein Verein** (ドイツ人は三人寄ればークラブ)

Otto Dann (Hg.), *Vereinswesen und bürgerliche Gesellschaft in Deutschland*. München 1984.

- Helmut Digel (Hg.), *Sport im Verein im Verband*. Schorndorf 1988.
- Otto Elben, *Der volkstümliche deutsche Männergesang. Geschichte und Stellung im Leben der Nation*. 2. Aufl. Tübingen 1887.
- Hans-Friedrich Foltin/Dieter Kramer (Hgg.), *Vereinsforschung*. Hessische Blätter für Volkskunde 16. Gießen 1984.
- Herbert Freudenthal, *Vereine in Hamburg. Ein Beitrag zur Geschichte und Volkskunde der Geselligkeit*. Hamburg 1968.
- Christel Köhle-Hezinger, *Gemeinde und Verein*. In: Rheinisches Jb.f.Volkskunde, 22 (1978), S.181–202.
- Michael Krüger, *Leibeserziehung im 19. Jahrhundert. Turnen fürs Vaterland*. Schorndorf 1993.
- Erich Reigrotzki, *Soziale Verpflichtungen in der Bundesrepublik. Elemente der sozialen Teilnahme in Kirche, Politik, Organisation und Freizeit*. Tübingen 1956.
- Annette Zimmer (Hg.), *Vereine heute – zwischen Tradition und Innovation. Ein Beitrag zur Dritten-Sektor-Forschung*. Basel etc. 1992.

#### 6. Natur und Geschichte (自然と歴史)

- Hermann Bausinger, *Volkskultur in der technischen Welt*. 2. Aufl. Frankfurt a.M./New York 1986.
- Gitta Böth/Gaby Mentges (Hgg.), *Sich kleiden*. Marburg 1989.
- Wolfgang Brückner, *Trachtenfolklorismus*. In: Utz Jeggle u.a. (Hgg.), *Volkskultur in der Moderne*. Reinbek 1986, S.363–382.
- Gudrun König, *Eine Kulturgeschichte des Spazierganges. Spuren einer bürgerlichen Praktik 1780–1850*. Wien etc. 1996.
- Albrecht Lehmann, *Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald*. Reinbek 1999.
- Regina Römhild, *Histourismus. Fremdenverkehr und lokale Selbstbehauptung*. Frankfurt a.M. 1990.
- Martin Scharfe, *Geschichtlichkeit*. In: Hermann Bausinger u.a. (Hgg.), *Grundzüge der Volkskunde*. 4..Aufl. Darmstadt 1999, S.127–203.
- Heinz Schmitt, *Volkstracht in Baden. Ihre Rolle in Kunst, Staat, Wirtschaft und Gesellschaft seit zwei Jahrhunderten*. Karlsruhe 1988.
- Friedemann Schmoll, *Schau und Anschauung. Aussichtstürme als Landschaftsbauwerke und nationale Denkmäler*. In: Schwäbische Heimat, 42 (1991), S.353–360.

#### 7. Ordnung ist das halbe Leben (規則は生きることの半分)

- Wolfgang Brückner, „Arbeit macht frei“. *Herkunft und Hintergrund der KZ-Devise*. Opladen 1998.
- Norbert Elias, *Über den Prozeß der Zivilisation. Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*. 2 Bde. Frankfurt a.M. 1976.
- Hellmut G. Haasis (Hg.), *Johann Benjamin Erhard. Über das Recht des Volks zu einer Revolution und andere Schriften*. München 1970.
- Utz Jeggle, *Alltag*. In: Hermann Bausinger u.a. (Hgg.), *Grundzüge der Volkskunde*. 4..Aufl. Darmstadt 1999, S.81–126.
- Sang-Hyum Lee, *Der deutsche Schäferhund und seine Besitzer. Zur Entwicklungs- und*

## バウジンガー ドイツ人はどこまでドイツ的？ II 国民性の検証

*Bedeutungsgeschichte eines nationalen Symbols. Diss.* Tübingen 1997.

Paul Münch (Hg.), *Ordnung, Fleiß und Sparsamkeit. Texte und Dokumente zur Entstehung der „bürgerlichen Tugenden“*. München 1984.

Paul Münch (Hg.), *Tiere und Menschen. Geschichte und Aktualität eines prekären Verhältnisse*. Paderborn etc. 1998.

Hubert Treiber/Heinz Steinert, *Die Fabrikation des zuverlässigen Menschen. Über die „Wahlverwandtschaft“ von Kloster- und Fabrikdisziplin*. München 1980.

### 8. Verstehen sie Spaß? (冗談が分かるの?)

Hermann Bausinger, *Der Witz der Sprache*. Marburg 1994.

Louis Bosshart/Wolfgang Hoffmann-Riem (Hgg.), *Medienlust und Mediennutz. Unterhaltung als öffentliche Kommunikation*. München 1994.

Wilhelm Fraenger (Hg.), *Deutsche Humor aus fünf Jahrhunderten*. Berlin o.J. (1929).

Hans-Dieter Gelfert, *Typisch englisch. Wie die Briten wurden, was sie sind*. München 1995.

Hans-Dieter Gelfert, *Max und Monty. Kleine Geschichte des deutschen und englischen Humors*. München 1998.

Michael Lentz u. a., *Ganz Deutschland lacht! Fünfzig deutsche Jahre im Spiegel ihrer Witze*. München 1999.

Kaspar Maase, *Grenzloses Vergnügen. Der Aufstieg der Massenkultur 1850–1970*. Frankfurt a.M. 1997.

Lutz Röhrich, *Der Witz, Figuren, Formen und Funktionen*. Stuttgart 1977.

Brigitte Sauzay, *Retour à Berlin. Ein deutsches Tagebuch*. Berlin 1999.

Herbert Schöffler, *Kleine Geographie des deutschen Witzes*. Göttingen 1955.

Mary Lee Townsend, *Humor und Öffentlichkeit im Deutschland des 19. Jahrhunderts*. In: Bremmer/Herman Rodenburg (Hgg.), *Kulturgeschichte des Mumsors. Von der Antike bis heute*. Darmstadt 1999, S.149–166.

Thomas Vogel (Hg.), *Vom Lachen. Einem Phänomen auf der Spur*. Tübingen 1992.

[訳注] (1～4節は「言語と文化」第20号の頁数)

#### 1. お国料理 — 食と飲み物への寸評

p.162 <デブの音楽> (Dickmusik): この奇妙な名称の起源は明らかではない。なおシュレスヴィッヒ＝ホルシュタイン地方の名物料理であると共に、旧東独地域の料理でも紹介される。

p.163 アスピック: ドイツ語では »Sulze«, アスピックは、肉・魚に煮汁とゼラチンを加えて固めたゼリー状の料理。

p.164 プロイセン国王フリードリヒ2世 (Friedrich II. von Preussen 1712–1786, 1740以来在位): 典型的な啓蒙専制君主で、合理的な国家経営への見通しと軍事的指導力を併せ持った政治家であり、プロイセンの近代化の土台を築いて大王と称される。ロココ宮廷にふさわしい音楽の才能を発揮し、文筆

家でもあった。

- p.164 フリードリヒ・リスト (Friedrich List 1789-1846) : ドイツの経済学者で多彩な文筆家・社会活動家。ヴュルテムベルクのロイトリンゲンに生まれ、最後はオーストリアのクーフシュタインでピストル自殺を遂げた。チュービンゲン大学で経済学を講じ、亡命としてしばらくアメリカに渡ってつぶさに事情を把握し、ドイツへ帰国後は特に関税政策の理論家であった。
- p.165 カール・フリードリヒ・フォン・ルーモール男爵 (Karl Friedrich Freiherr von Rumohr 1785-1843) : ドレスデンに生まれ、ブレスラウに没したドイツの文化史家、作家、料理誌家。旅行家でもあり、たびたびイタリアを訪れた。プロイセン国王フリードリヒ=ヴィルヘルム4世とデンマーク国王クリスチアン8世の客として遇された。
- p.165 ブリヤ=サヴァラン (Jean Anthèlme Brillat-Savarin 1755-1826) : フランスの弁護士で、革命期にはスイスとロンドンに逃れ、ナポレオン治下にフランスへ帰った。著述に携わり、特に料理を多方面に論じ、それを踏まえた『嗜好の生理学』(La Physiologie du Gout, 1826) が知られる。
- p.165 一人用鍋料理 (Eintopf) : 質素なごった煮で栄養価も高い伝統的な田舎食。今日でもさまざまなタイプが絶えず現れ、根強い人気を保っている。ナチスに持ち上げられた経緯がある。
- p.165 民族共同体 (Volksgemeinschaft) : ナチス・ドイツがドイツ国民・民族の一体性を神秘化するのに用いた呼称、〈フォルク共同体〉とも訳される。
- p.165 ケルシュ (Kölsch), …… ミュンヒェン (München), ドルトムント (Dortmund) の宮廷御用達ビール (Hofbräu) : ケルシュはケルン地方で作られるビールで、大麦麦芽と小麦麦芽を上面発酵酵母を用いて下面発酵に近い低温で通常のエールより時間をかけて作られる。; ドルトムントはルール工業地帯の中核都市で20世紀末までは多くの醸造所があったが現在は一社に統合されている。古い帝国都市であるがビール生産が大規模になったのは19世紀にはいつてからであった。; ミュンヒェンの宮廷醸造所は16世紀にバイエルン大公ヴィルヘルム5世が宮廷と廷臣用に設立させ、19世紀はじめにルートヴィヒ1世によって一般向けの販売に開放された。伝統的に小麦を主原料にした下面発酵酵母によるラガーが多い。
- p.166 <パリサイ人> (Pharisäer) : ユダヤ教においてパリサイ派は紀元1世紀頃の主流派で、律法に厳格で形式主義とされる。偽善者の意味としても用いられる。
- p.166 ノルベルト・エリーアス (Norbert Elias 1897-1990) : ブレスラウに生まれ、アムステルダに没した社会学者・哲学者。ユダヤ系であったため、1933年にフランス、次いでイギリスに亡命した。1954年にはじめてイギリスのライセスター大学で社会学の講師となり、1962年からはガーナのアクラ大学での教授を経て、1975年からアムステルダムに住んだ。主著『文明化の過程』(Über den Prozeß der Zivilisation. 1939) をはじめ、歴史研究を踏まえた社会理論において重要である。
- p.167 プロセッコ (prosecco) : 北イタリアのヴェネト州 (ヴェネチアを含む) で生産される葡萄の品種、またはそれから作られたスパークリング・ワインで、»Prosecco di Conegliano« などの銘柄がある。価格には幅があるが、EUの原産地名保護制度によって認証されたブランド品でもある。白ワインが主であることから、一般に白ワインを好むドイツ人には同種であって話題性を楽しめるようである。

2. 狭くても気楽なのが……

- p.167 ギザクセンの<sup>ハレン</sup>広間家屋 (Hallenhaus) : 北ドイツでは、家屋の内部を部屋に区切らず、大きなホール状につくる民家の様式が特徴的で、この名称で呼ばれる。
- p.167 フランケン地方の農民屋敷 (Gehofen) : 母屋と厩舎を組み合わせた、間借り屋のような様式。

## バウジンガー ドイツ人はどこまでドイツ的？ II 国民性の検証

- p.167 バイエルンの屋敷家屋 (Hofanlage) : 城館建築とも通じて、中庭をもつ構造が特徴的である。
- p.168 <イボタノキ・ファシスト> (Ligusterfaschisten) : 和名イボタノキはモクセイ科で、樹高は2m 近くになる。デンマークでは防風林として屋敷囲いに植えられるため、一種のシンボルとなっている。外国人の流入に対して、屋敷囲いさながら防衛策をとる風潮を指して、近年、批判的な観点から用いられる。
- p.170 ハインリヒ・バーベル (Heinrich Bebel 1472-1518) : ドイツの詩人、人文主義者。クラクフ、パーゼル、テュービンゲンで学び、後、テュービンゲン大学で詩学と弁論学の教授となった。
- p.171 ハンス・グリム (Hans Grimm 1875-1959) : ヴェーザー河畔リッポルツベルク (Loppoldsberg an der Weser) 出身。当時ドイツの植民地であった南西アフリカ (ナミビア) とドイツを行き来して成長した。その経験を活かして、不遇の中で執筆した長編小説『土地なき民』(Volk ohne Raum) は1926年に刊行されると、第一次世界大戦の戦後処理に対する不満とルサンチマンを抱いていた多くのドイツ人の心理と合致したベストセラーとなり、やがて<ナチ文学の聖典>と称された。内容は、南西アフリカで苦勞の末成功したドイツ人入植者が、ドイツが植民地放棄を強いられたためにすべてを失い、さらに帰国したドイツでは外国勢力の意を迎える者たちから迫害され、非業の死を遂げるという筋となっている。

### 3. 同じ所に住み続け、そして旅行が大好き

- p.175 アラン・ダンデス (Alan Dundes 1934-2005) : ニューヨークに生まれ、パークレーで没したアメリカの文化人類学者。エール大学とブルーミントン大学で学び、1962年に「北米インディアンの民話の形態学」で学位を得、多方面の活躍を見せ、特に口承文藝研究のリーダーであった。
- p.175 <押付けの愛> (oknophilen) すなわちしがみ付きへの希求 (Anklammerungsbedurftigen) 的な動きのないタイプを、他方、アメリカには、<遠くへ向う愛> (philobagisch) すなわち流動的で境界を踏み越えるタイプ
- p.176 <生業地戸籍> (Unterstützungswohnsitz) : 仕事をもって働く者については、その生業の地において登録を受け付け、種々の権利を認める政策が、19世紀の80年代から一般化した。
- p.177 <三分の二の社会> (Zweidrittelgesellschaft) : 先進工業国の社会構造として1980年代から言われるようになった術語。豊かな福祉社会にも拘らず、まともな職業に就いているのは三分の二であり、労働人口の三分の一は非正規やパートタイム職が不可避となる社会構造が指摘され、特に<ニュー・ブア>と関係して社会学の分野でこの術語が用いられる。
- p.178 <シュヴァーベン人と悪貨を／悪魔が世界に撒き散らす> (Die Schwaben und das böse Geld/führt der Teufel in alle Welt) : 経済史的にも注目される言い回しである。シュヴァーベン人が中世末には特徴的な幾つかの悪評を受けていたことについて、バウジンガーは他の箇所でも考察を加えている。
- p.178 <ドイツ人の照り焼き> : 原語は „Teutonengrill“。

### 4. くつろげるのが何より

- p.180 フリードリヒ・テオドル・フィッシャー (Friedrich Theodor Vischer 1807-1887) : シュヴァーベンのルートヴィヒスブルク (Ludwigsburg) に生まれ、オーストリアのグムデン (Gmunden am Traunsee) で没した学者、作家、ジャーナリスト。テュービンゲン大学で神学と哲学を学び、文筆に携わり、各地を旅行を経験し、大著『美学』を表した。1866年からテュービンゲン大学教授として

美学を講じた。

- p.180 <ビール仲間の政治論議>：原語は „Biertischpolitik“ (ビールのテーブルの政談), 邦語の床屋政談に当たるであろう。
- p.182 イースター兎 (Osterhase, Easter Bunny)：復活祭には兎が卵を運んでくるとして、色付けした卵を子供にプレゼントをする習慣がある。またその卵は兎が産む、ともされる。あまり古くはなく19世紀以前には遡らないと考えられている。起源については諸説があるが、復活祭に焼かれる姿焼きの菓子の子羊 (キリストのシンボル) の誤認ないしはそこからの着想との説が有力である。ロマン派時代の絵本の題材になったことなどが推進力となってヨーロッパだけでなく、北米でも今日では復活祭の一般的な風物となっている。なお復活祭近辺から聖霊降臨節近辺にかけて、卵を用いる種々の行事 (卵拾いの競争など) が今も散見されるが、これらは古い伝統の場合がある。
- p.183 ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、提唱者フェルディナント・テンニエス (Ferdinand Tönnies 1855–1936)：テンニエスはシュレスヴィヒ＝ホルシュタインのオルデンスヴォルト (Oldenswort) に生まれ、キールに没した社会学者。1887年に『ゲマインシャフトとゲゼルシャフトー経験的文化形態としてのコミュニズムとソシアリズム』(Gemeinschaft und Gesellschaft: Abhandlung des Communismus und Socialismus als empirischer Culturformen) を著した。第二版 (1912年) ではサブタイトルが <純粹社会学の基本概念> となったが、その理論は集団形成の基本的な2種類の提唱として大きな意義をもった。ゲマインシャフトは伝統的な村社会のような自生性の強い人間結合、ゲゼルシャフトは企業や目的をもった団体のような個々人の自発性と目的意識・定款の明確な集団とされる。今日では多くの批判と修正が加えられているが、古典理論の意義をもっている他、ドイツ語で „Gemeinschaft“ が一般化したのはテンニエスの影響による。ナチス・ドイツがゲマインシャフトの語を利用して、ドイツ人の一体性を „Volksgemeinschaft“ と呼号したなどの問題も派生した。

#### 5. ドイツ人は三人寄れば一クラブ

- p.50 クラブ (Verein)：ここでクラブと訳したドイツ語は „Verein“ で、19世紀の早い時期から、伝統的な種々の形成 (隣人組や兄弟団など) とは異なる自発的な集団形成が盛んになった。今日で言えばクラブやサークルのようなものであるが、折からのナショナリズムと重なり、それが意識される度合いが高い特色があった。個人を基礎にした近代的な集団形成のドイツ的なタイプとい面がある。協会と訳してもよい。
- p.51 1848–49年の革命：1848年2月パリで民衆が蜂起し、大ブルジョワジーの利害に傾きがちであった国王ルイ・フィリップが退位に追いこまれた。それが波及してドイツの三月革命となった。それによって、ナポレオンを追放した後の国家間の調整役であったオーストリア宰相メッテルニヒが失脚した。しかし次のシステムに移行するには条件が不足しており、革命は不発に終わった。頂点はフランクフルト国民議会であったが、プロイセン王を統一ドイツのリーダーに望んだが王によって拒否された。臨時的にオーストリア太公ヨハンを <摂政> に選んだが、辛うじて形を作ったに過ぎず、そのポストも翌年中には消滅した。
- p.51 体操者 (Turner)：フリードリヒ・ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn 1778–1852) が集団的な身体訓練を愛国主義運動として提唱し、同じ思想の協力者と共に1811年にベルリンのハーゼンハイデ (Hasenheide) に最初の体操施設を設けたことによって運動が始まった。体操者 (Turner) はヤーンの思想による活動家や体操を行なう者を指す。プロイセン首相ハルデンベルクの支援を得てはじめは順調であったが、王政復古期に入るとメッテルニヒが体操者の自由主義的傾向を咎め、ヤーンも監禁さ

## バウジンガー ドイツ人はどこまでドイツ的？ II 国民性の検証

れた。ヤーンは1840年に恩赦を受け、以後は体操運動の創始者として敬愛された。体操クラブも各地で作られ、愛国運動の性格を帯びて発展した。

p.51 **ドイツ帝国の成立**：1870年7月からプロイセン（ドイツ）とフランスがいわゆる普仏戦争に突入り、宰相ビスマルクの指揮下で周到な準備をしていたプロイセンが、フランス皇帝ルイ・ナポレオンを投降させた。紆余曲折の後プロイセン軍はパリに迫り、翌1971年1月18日にヴェルサイユ宮殿でドイツ帝国の成立が宣言された。

p.52 **テオドル・ホイス (Theodor Heuss 1884-1963)**：西ドイツの初代連邦大統領（在任 1949-59）バーデン＝ヴュルテムベルク州ブラッケンハイム出身。ミュンヘン大学とベルリン大学で経済学、歴史学、美術史などを学び、葡萄農家の研究で学位を得た後、フリードリヒ・ナウマンの下で雑誌„Die Hilfe“を発行し文筆と政治に携わった。ナチス・ドイツ下でも概してリベラルな姿勢を保ち、戦後は地方議会において政治活動を再開し、次いで自由民主党 (FDP) の推す候補として大統領を2期務めた。

p.52 **ボリス・ベッカー (Boris Becker 1967年生)**：ドイツのライメン出身のプロ・テニス・プレーヤー、1984年にプロ入りし、1985年にウィンブルドンで史上最年少（17歳7か月）で初優勝し、以後、国際大会を舞台にドイツ・テニスの黄金時代を築いた。

p.52 **シュテフィ・グラフ (Steffi Graf 1969年生)**：ドイツのブリュール出身のプロ・テニスプレーヤー。1980年代半ばから90年代後半まで、ウィンブルドン、全仏オープン、五輪などで優勝を重ね、世界の女子テニスの頂点に立った。

### 6. 自然と歴史

p.54 **カール・ヤーコブ・ブルクハルト (Carl Jacob Burckhardt 1891-1974)** スイスの外交官、エッセイスト、歴史家。

p.54 **フリースラント (Friesland)**：オランダとドイツの北海沿岸地方とそれに沿う鎖状のフリースラント諸島を指す。古く、ゲルマン人の一派フリース人が住んだことに因む。西フリースラントはオランダの北部、東フリースラントは独ニーダー・ザクセン州の一部、北フリースラントは独シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州の北海沿いを言う。

p.55 **フンスリュック (Hansrück)**、「森の喜び」(Waldeslust)：フンスリュックは、大部分はラインラント＝プファルツ州、一部はザールラント州に属し、北西はモーゼル川、東にはライン河に接して、多数の森が存在する地域。は「森の喜び」は自然讃歌の代表例として知られている。

p.55 **ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ (Josef von Eichendorff 1788-1857)**：上部シレジアのラティボール近郊ルーボヴィッツ城 (Schloss Lubowitz bei Ratibor/Oberschlesien) にプロイセン將軍の息子として生まれ、ナイセ (Neisse) で没したロマン派の詩人・作家。

p.56 **裸体文化 (Freikörperkultur)**：ドイツ語ではヌーディズムは（直訳すると）〈自由身体文化〉という言い方をする。

p.57 **ローデン・コート (Lodenmantel)**：Loden：ローデン＝防寒・防水の厚手の粗織りウール地

p.57 **ヤンケル (Janker)**：バイエルン風の上着、革製の半ズボン (Lederhose)

p.57 **ダーンドウル (Dirndlkleid)**：きっちりした胴衣とゆるやかなギャザースカートから成るバイエルンやオーストリアの婦人用民俗衣装)

p.58 **1918年の革命**：第一次世界大戦のドイツの敗戦のなかで、ドイツ社会民主党左派の指導のローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトが中心になって起きた革命で、保守派によって残酷

に鎮圧された。

p.58 1848年の革命：前出，参照，p.51の訳注。

p.58 ナポレオン時代：ナポレオンは1798年にフランスの政府を掌握し，次いでヨーロッパ全域に軍事的に進出した。それは1812年のナポレオンのロシア遠征の失敗まで続いた。

p.58 三十年戦争 (Dreißigjähriger Krieg)：1618年から1648年まで長期にわたってドイツ地域を中心に起きた宗教がからんだ国際戦争。

p.58 王政復古時代 (Epoche der Reformation)：ナポレオンの敗退と共に古いヨーロッパの国家体系と秩序に戻る動きが起きた。リーダーはオーストリア宰相メッテルニヒであった。

p.58 シュタウフェン朝の皇帝時代：シュタウフェン家はシュヴァーベンの貴族家門で，12，13世紀にドイツ王と神聖ローマ皇帝を輩出する大支配家門となった。神聖ローマ皇帝位は1138年-1208年，1215-1254年で，とりわけフリードリヒ1世 (皇帝在位1152-1190) の時代で頂点であり，また中世の最盛期でもあった。歴史的にはドイツ国内の統治や対外政策で問題も多かったが，多くのドイツ人には，強力で賢明な皇帝の下に国威が発揚した時代として誇りをもって回顧される。

p.58 黎明期 (Vorgeschichte)：前史とも訳せるが，ここではほぼ同義で用いられるこの訳語を当てた。特にゲルマン民族が歴史時代に入る直前の時代を指す。

p.58 標し旗にも幟旗にも：しるし旗 (Fahne) はかなり大きいものが多いが振るための旗，のぼり旗 (Standarte) は集団の中心を明示するための旗で日本の戦国時代の馬印のような機能をはたす。

#### 7. 規則は生きることの半分

p.59 規則 (Ordnung)：„Ordnung“ は <秩序> と訳す方が適切な場合もあるが，ドイツ人にとってはこの語は一般的な社会運営の仕組みであると共に，個々のルールや定めとも強く重なる語感があるため，ここで主に <規則> とした。

p.61 ルートヴィヒ・ハーリッヒ (Ludwig Harig 1927生)：ズルツァッハ (Sulzach/Saar) に生まれた文筆家。1950年代から1974年まで高等学校教師の傍ら創作に携わった後，作家活動に専念した。最初期の作品の一つに「ハイク・ヒロシマ」がある。

p.62 警部デリック (Kommissar Derrick)：テレビ映画の推理ドラマのシリーズで，その主人公の名前。原作ヘルベルト・ライネッカー (Herbert Reinecker 1914-2007)，1978年にZDF局で第一作が放映され，281作まで製作された。

p.63 ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin 1706-1790)：ボストンに生まれ，フィラデルフィアに没したアメリカの，出版人，自然科学者，発明家，またアメリカ独立運動の指導者の一人であった。経営における勤勉を説いたことが，ここでの文脈で注目されている。マックス・ウェーバーが資本主義のエートスのみとめた思想によっても知られる。

p.63 マックス・ウェーバー (Max Weber 1864-1920)：エルフルトに生まれ，ミュンヘンで没したドイツの社会学者。ここではその主著の一つ「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(1904)における著名な理論に触れている。

p.64 フリードリヒ・リスト：前掲，第20号 p.164への訳注。

p.64 ヨーハン・ハインリヒ・カンペ (Johann Heinrich Campe 1746-1818)：ドイツのニーダーザクセンのホルツミンデン近郊デーゼン (Deensen bei Holzminden) に生まれた文筆家，教育家，出版編集者。教育家としてはハンプルクとブラウンシュヴァイクで活動した。多作家で，児童教育のためにロビンソン物も執筆した。

## バウジンガー ドイツ人はどこまでドイツ的？ II 国民性の検証

- p.64 カント (Immanuel Kant 1724-1804) : 東プロイセンのケーニヒスベルクで生まれ、同市で没した哲学者、ドイツ観念哲学の定礎者。
- p.64 ハインリヒ・ホフマンが (Heinrich Hoffmann 1809-1894) : 『もじゃもじゃ頭のペーター』 (Struwwelpeter) : 医師で作家のH.ホフマンが1844年のクリスマスに自ら挿絵つきで製作したコミカルな童話。三歳の長男にあたえようとしたとされている。聞き分けのない男の子ペーターが主人公で、また、ものぐさであるため、髪の毛と爪が伸び放題の格好で描かれている。
- p.65 19世紀初めの解放戦争 (nationale Befreiungskämpfe) : 英語では German War of Liberation とも言い、ナポレオン指揮下のフランスに対する一連の戦いにおける最終段階を指す。1812年6月から始まったナポレオンのロシア侵攻が同年12月に壊滅したのを見て、プロイセンが率先して動いて第六次対仏大同盟が成った。ドイツから見た時の頂点は1813年10月16～19日のライプツィヒの戦いで、両軍併せて60万人が激突し、その勝利によって、ナポレオンのドイツ支配は終わり、1814年4月4日にナポレオンは退位し、同月31日に連合国がパリに入った。
- p.65 1970～71年の普仏戦争 : プロイセンの主導で隣国ドイツが統一されることを警戒するフランスに対して、プロイセン宰相ビスマルクは周到な準備の上に、チャンスを捉えて戦術を弄して1870年7月にルイ・ナポレオンの宣戦布告を誘い出し、電撃的な勝利をおさめた。それによってフランスでは第二帝政が崩壊し、パリ・コミューンとその鎮圧、そして翌年1月にはドイツ帝国の成立へと進んだ。きわめて効率よく推移した戦争で、ドイツ軍事史の栄光の頂点であるが、やがてドイツ人は戦争を理想化し楽観するようになった。
- p.65 カール・ツックマイヤー (Carl Zuckmayer 1896-1977) : ツックマイヤーはドイツの劇作家。母親がユダヤ系であったため、1938年にスイス、次いでアメリカに亡命した。『ケーペニックの大佐、ドイツ・メルヒェン』 (Der Hauptmann von Köpenick. Ein deutsches Märchen) は1931年にベルリンのドイツ劇場で初演された喜劇。筋：靴職人フォークトは何度も詐欺をはたらいたために15年の禁固の後、釈放されて正業に就こうとするが、身分証明書が無いために失敗を繰り返した後、舞い戻った刑務所の図書館で軍隊の規則を暗唱する。釈放された彼は、偶々ケーペニックの市長が脱ぎ捨てた大佐の軍服を手に入れて着ると、誰もが高級軍人として遇する。最後に発覚するが、ドイツ皇帝の計らいで許され、身分証明書もあたえられる。実話を基にしており、高級軍人の変装がまかり通るところに風刺とユーモアを効かせている。
- p.65 <働けば自由になれる> (Arbeit macht frei) : 元は作家ローレンツ・ディーフェンバッハ (Georg Anton Lorenz Diefenbach 1806-1883, ヘッセン州Ostheim/Wetterau生, ダルムシュタット没) が1873年にプレーメンで刊行した小説の題名で、前年に「ウィーン新聞」に予告された。<働くことは生き甲斐だ> くらいの意味で、小説では賭博者と詐欺師が規律ある生業を通じてまっとうな人間に立ち返る。その後ヴァイマル時代に失業問題のスローガンの一つとして用いられた。しかし今日知られるのは、ナチスが数か所の強制収容所の門にこの標語を掲げたため、特にアウシュヴィッツ・ビルケナウのユダヤ人収容所の門でBの文字が歪んでいるのは、作らせられた捕囚の抵抗を表すとも解される。

### 8. 冗談が分かるの？

- p.66 意地悪い喜び (Schadenfreude) : 近い他人の不幸に接して喜びを覚えるのは一般的な社会心理の一面であるが、ドイツ語にはそれを一言で表すものとしてこの語がある。またそれ故にドイツ的であるとの揶揄は、ドイツ人自身も自嘲的に言うことがある。ただし、これは合成語で、ドイツ語がもつ高い造語能力の証しでもある。

- p.67 バーデンとビュルテムベルクが統合：南西ドイツにおいて、バーデンはライン川に沿った地域、ヴュルテムベルクはその東側に隣接し、中世から公国であった。ここで言われる統合は、第二次世界大戦後の地域再編によって1952年にバーデン＝ヴュルテムベルクがドイツの一州となったことを指す。
- p.68 <ローマ人からは酒が飲める。……ギリシア人から飲めねえだ？>：ローマ人を意味する „Römer“ はワイングラスの一形態の名称でもある（ローマ風酒盃）。2義が分かった上での応えに対して、それを知らないザクセン人が疑問を呈するという場面設定。
- p.68 ブロンド・ジョーク (Blondinenwitz/blonde joke)：金髪の女性は頭が弱いとの前提の下に話されるジョーク。一例：<ブロンド女を月曜の朝に笑わせるには？— 日曜の夜にジョークを聴かせればよい>。20世紀後半・末期に高まりを見せ、それを背景に2001年にアメリカで製作されたコメディ・タッチの映画「キューティ・ブロンド」によって一層ブームとなった（映画の原題：Legally Blonde, 監督 Robert Luketic, 主演：リース・ウィザースプーン Reese Witherspoon）。起源については諸説がある。エスニック・ジョークの派生形として差別的な意味合いに重点をおく場合には、金髪・碧眼を誇りとしてきたドイツ人が神経質になるところもある。また別の説では、金髪は美女の条件の一つとなってきた面があり、それゆえ大半の男性には手が届かないことへの代償的な心理を映すとされる。
- p.68 オーフス・ウィット (Aarhus-Witz)：オーフスはユトランド半島東岸にある古都で、デンマーク第二の都市、人口28万人。コペンハーゲンとは違ったデンマーク人の特性が話題になることが多い。洗練された都会性にはやや不足することをネタにしたジョークで、本邦で一時期口にされた <サイタマ> のごとき趣きを含む。
- p.68 シルダ (Schilda)：シルダは、架空の都市の名前で、民衆本に頻繁に現れ、その市民はいたずら好きな主人公や、また主人公にからかわれる馬鹿な民衆でもあった。シルダの元になった町としては、ザクセンのシルダウ (Schildau) やブランデンブルクのシルダ (Schilda) などが挙げられる。
- p.69 オイレンシュピーゲル (Till Eulenspiegel)：ティル・オイレンシュピーゲルはユーモラスな民衆本の主人公。身分や慣習の裏を搔いて度胸のあるいたずら者として描かれている。1500年代初めにニーダーザクセンで刊行された版が現在知られる最古である。非常に人気を博し、16世紀中にはヨーロッパ各国に翻訳された。またハンス・ザックスもこの主人公の登場させて謝肉祭劇を書き下ろした。
- p.69 ヨーハン・フィッシャルト (Johann Baptist Fischart 1546 or 47-1591)：ストラスブルに生まれ、ロレーヌのフォルバッハ (Forbach/Lothringen) に没したドイツ近代初期の作家。ウィルムスとチュービンゲンで学び、バーゼルで法学の学位を得た。はじめルター派に属し、カルヴァン派に転じた。一時期シュパイアで弁護士、1583年からフォルバッハの官吏であった。各種の作品があり、韻文によるユーモア作品としてオイレンシュピーゲルものも手がけた (Eulenspiegel Reimenweis, 1572)。
- p.69 ラブレー (Francois Rablais 1483-1553)：フランス・ルネサンスを代表する作家。『ガルガンチュアとパンタグリユエル物語』で知られる。
- p.69 グリメルスハウゼン (Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen 1622頃-1676)：ゲルンハウゼン (Gelnhausen/Hessen) に生まれ、レンヒェン (Renchen/Baden) に没したドイツ・バロック時代の作家。代表作は大作『ジムブリチシムス (邦訳：阿呆物語)』(Der abenteuerliche Simplicissimus Teutsch, d.h. die Beschreibung des Lebens eines seltsamen Vaganten, genannt Melchior Stempfels von Fuchshaim. 1683/84, 1685/99, 1713) は、名もなき主人公が運と度胸と悪智慧で世をわたるいわゆる悪漢小説 (Schelmenroman) の傑作である。

## バウジンガー ドイツ人はどこまでドイツ的？ II 国民性の検証

- p.69 ヴィルヘルム・ブッシュ (Wilhelm Busch 1832-1908) : シュタットハーゲン近郊ヴィーデンザール (Wiedensahl bei Stadthagen/NS) に生まれ、ハルツ山麓メヒトハウゼン (Mechthausenn am Harz) に没したドイツの代表的なユーモア作家で、挿絵などスケッチも手がけた。デュッセルドルフ、アントワープ、ミュンヘンで工学、藝術を学んだ後、風刺画家として出発した。1865年に刊行した『マックスとモーリッツ』(Max und Moritz) は大きな成功を取めると共に、いわゆるコミック・ストリップの先駆けの一つとなった。
- p.69 カール・クラウス (Karl Kraus 1874-1936) : チェコのイチン (Jicin) に生まれ、ウィーンに没したオーストリアの作家、劇作家。
- p.70 ハイน์リヒ・ベル (Heinrich Böll 1917-1985) : ケルン出身で、クロイツァウ＝ランゲンブローヒ (Kreuzau-Langenbroich/Nrhein-Wf.) に没したドイツの小説家。第二次世界大戦後まもなくから活動を始めた世代の作家としてヒューマニズムを基調とした。1972年にノーベル文学賞を受けた。
- p.70 タデーウス・ノワコフスキー (Thadäusz [Tadeusz] Nowakowski 1917-1996) : オルステン (Olsztyn) 出身、ビュドゴシュ (Bydgoszcz) に没したポーランドの作家。
- p.70 ジェローム・K・ジェローム (Jeorme K. Jerome 1859-1927) の『ボートの三人男』(Three men in a boat) : スタッフォード・シャーのウォルソール (Walsal, Staffordshire) に生まれノースハンプトンで没したイギリスの作家。一家の没落のために貧窮にうちに育ち、種々の職業を転々として独学に励み、はじめ俳優を目指したが、ジャーナリストに転じた。結婚してハニムーンをテムズ川で過ごしたことから着想し、歴史の勉強を折りこんで執筆したユーモア旅行小説『ボートの三人男』は大成功を博し、今日まで人気を保つほどの代表作となった。
- p.71 ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(Wilhelm Meisters Lehrjahre) : ゲーテ (1749-1832) の長編小説、2部構成の第一部にあたる。タイトル名の主人公の成長過程を描き、ドイツの文学類型とされる教養小説としても不滅の古典である。1795/96年に一応完成し、その後も改作が続けられ、1821年に刊行された。
- p.71 レッシング (Gotthold Ephraim Lessing 1729-1781) : 啓蒙主義時代のドイツの劇作家。ザクセンのカメンツ (Kamenz) で生まれ、ブラウンシュヴァイクに没した。
- p.71 戯曲「ミンナ・フォン・バルンヘルム」(Minna von Barnhelm) : レッシングが1767年に完成させた喜劇。
- p.71 シューバルト (Christian Friedrich Daniel Schubart 1739-1791) : 南西ドイツのオーバーゾントハイム (Obersontheim) に生まれ、副牧師の息子としてアーレンで成長し、最後はシュトゥットガルトに没した。はじめオルガン奏者、長じて、詩人、作家、ジャーナリストと活躍し、特に下層民衆への共感と、専制君主体制への批判的視点をもっていた。
- p.72 ハイน์リヒ・ハイネ (Heirich Heine 1797-1856) : デュッセルドルフ出身で、パリで客死したドイツ・ロマン派を代表する詩人。同時代のドイツの政治・文化への批判者でもあった。
- p.72 リンゲルナッツ (Joachim Ringelnatz 1883-1934) : ザクセンのライプツィヒ近郊ヴルツェン (Wurzen) 出身、ベルリンで没した詩人、キャバレー詩の文筆家。
- p.72 クルト・トゥホルスキー (Kurt Tucholsky 1890-1935) : ベルリン出身、スウェーデンのゲーテボルクに没したドイツの作家、ジャーナリスト。
- p.72 エーリヒ・ケストナー (Erich Kästner 1899-1974) : ドレスデンに生まれ、ミュンヘンに没したドイツの作家、脚本家、キャバレー詩作家。

p. 72 ローベルト・ゲルンハルト (Robert Gernhardt 1937-2006) : エストニアのレーヴァル (タリン) 出身, フランクフルトに没した文筆家で, 諧謔風の作品を持ち味とした。